

学術フロンティア・サブプロジェクト①異文化研究としての「国際日本学」の構築

国際日本学シンポジウム 「人体と身体性」

- 日 時：2009年11月1日（日）～11月3日（火）
- 場 所：アルザス欧州日本学研究所（フランス・キーンツハイム）
- 主 催：法政大学国際日本学研究所、フランス国立科学研究学院（UMR8155）、ストラスブール大学日本学部、アルザス欧州日本学研究所

国際日本学研究所 [HIJAS] が主催する「国際日本学」を掲げた国際シンポジウムは、2005年のパリ・シンポジウムが第1回であり、その後2007年にアルザス・シンポジウムに姿を変えて、今回で5回目を数える。日本と日本文化とを内外の二つの視点から同時に照射し、そこにこれまでにない立体的な視像を得ていこうという国際日本学の試みは、まずは、そのような方法論から生じる原理的な問題を問うことで展開されてきた（「国際日本学とは何か」2005年、「ことばとことばを越えるもの」2006年、「翻訳不可能性」2007年）。そのような基礎作業を踏まえて、方法論を具体的に適用することの第一弾として、2008年のシンポジウムでは天皇制がテーマとして取り上げられた。続く今回2009年シンポジウムでは身体論（人間の身体、人体の問題）が取り上げられることとなった。

*

問題の広さ複雑さに鑑みて、今回もシンポジウムに先立って4回の事前勉強会を開催した。それぞれの勉強会は別のページで報告されているので、ここではその詳細には立ち入らない。それぞれの勉強会には身体論のさまざまな専門家にお越しいただき、レクチャーをしていただいた（その内の3人にはシンポジウムそのものにも参加していただいた）。4回のテーマと講師は以下であった。①2009年7月4日「身体と姿勢——東アジアの伝統の中で」（ポルドー大学 アンヌ・ゴッソ氏）、②2009年7月24日「人体を総合的に考える——文化を生む人間・文化に条件づけられる人間」（人類学者 川田順造氏）、③2009年9月30日「3DCGに基づく能の所作単元の分類と型付の解釈」（法政大学デザイン工学部 岩月正見氏）、④2009年10月9日「奇形の背後にあるもの」 伝

統的なまた現代の視覚メディアにおける妖怪図」（法政大学グローバル教養学部 ジリア・パップ氏）

*

さてこのような準備を経ての11月初頭3日間のアルザス・シンポジウムでは、日本（法政大学）から参加の8名——発表順で、小秋元段、小林ふみ子、ジリア・パップ、相良匡俊、川田順造、山中玲子、岩月正見、安孫子信一と、ヨーロッパから参加の8名——同じく発表順で、Rajyashree Pandey（ロンドン大学）、Josef Kyburz（パリCNRS）、Peter Ackermann（エルランゲン＝ニュルンベルグ大学）、Lucia Dolce（ロンドン大学）、Yves Cadot（パリ第7大学）、Martina Ebi（チュービンゲン大学）、Christian Oberlaender（ハレ＝ヴィッテンベルグ大学）、Christian Steineck（チューリッヒ大学）——の計16名が、全部で15個の研究発表を行い（1個が2名による共同発表）、また各発表後には参加者間で活発な議論を展開した。

ここで今回の発表の内容を簡単に確認してみたい。第一に発表の題材を整理してみれば以下となる。まず人間の身体が、文学的に文字で表現された場合を扱ったものが2編あった——Pandey（源氏物語）、小秋元（軍記物語）。また図象・絵画で表現された場合を扱ったものは3編である——小林（あぶな絵）、Kyburz（美術史）、パップ（妖怪図）。さらに演劇・音楽・スポーツでの人体の現れを扱ったものが3編あった——相良（明治の音楽教育）、Cadot（柔道）、山中・岩月（能）。さらに宗教での現れを扱ったものは1編である——Dolce（日本仏教）。そして医学・医療、またそれとつながる倫理・哲学での身体の扱いを取り上げたものは3編である——安孫子（西周の身体論）、Oberlaender（解剖学の成立）、Steineck（生命倫理）。最後に、日常的な身体使用、身体に関わ



研究発表の様子（左から安孫子所長（法政大学教授）、ジョゼフ・キブルツ教授、サカエ・ムラカミ＝ジルー教授）



会場の様子

る言語使用の観察から論じたものが3編あった——Ackermann (ボディ・ランゲージの問題)、川田 (身体使用の日本・西欧・アフリカからの三角測量)、Ebi (身体部位名詞の使用)。

第二に時代的に見れば以下となる。明治以前の伝統的日本から主に資料を得ていたものが6編あった——Pandey、小秋元、小林、Kyburz、Dolce、山中・岩月。また明治近代日本を中心に置いたものは4編である——相良、Cadot、安孫子、Oberlaender。さらに主に現代を問題にしていたものは4編である——Ackermann、川田、Ebi、Steineck。最後に文字通りに通史的であるものが1編あった——パップ。

第三に研究方法ということ言えば次のようになる。文学史、美術史、思想史、社会史を含む、そして時に現代をも扱う、歴史的方法を用いていたものが圧倒的に多く11編あった——Pandey、小秋元、小林、Kyburz、パップ、相良、Dolce、Cadot、安孫子、Oberlaender、Steineck。それ以外では3編で言語学、文化人類学が方法として用いられていた——Ackermann、川田、Ebi。最も異色を放っていたのは、それ自身文学史に属するであろう能の所作の研究に、最新の工学的手法を適用したものであった——山中・岩月。

以上の学際的にきわめて多様で多彩な内容が、‘公用語’としては日本語と英語を用いて発表され、また討議されていった。その内容を以下かいつまんで述べてみよう。

*

人体 (human body) は、それ自らに備わる感覚器官が知覚する最初の対象であり、意識もそこに根付いている。知覚の対象として、人体はすでに文化的概念であって、人体の知覚も表象も使用も、文化によって異なっている。そして人間 (person) や自己 (self) の観念も、それが人体と不可分である限りで、文化によって異なったものになる。[Kyburz、Ackermann、川田、Ebi]

西洋の概念に従えば、人間は明確に分かたれた二つの構成要素、すなわち、自我 (精神、靈魂、心) と呼ばれる抽象的存在と身体とから成っている。人間が身体を対象として立てて思考し、観察し、使用しうるのは、この主観・客観の二分に依っている。西洋人は自らの身体 (body) を観察する際に距離を置くが、そのような距離が客観的な精査に道をひらき、身体を科学の対象とすること (医学、体操、具象芸術、宗教思想、哲学、人類学)、また求める効果を生みだす道具とすること (声、音楽、踊り、演劇、労働、鍛錬、スポーツ) を可能としたのである。それと直面した近代日本については、独自の感じ方を維持しながらも、西洋の概念にむしろかなり上手に適応していったことが確認されている。[相良、安孫子、Oberlaender、Steineck]

さて、それでは伝統日本では、人体そして人間はどう扱われていたのか。長大な『源氏物語』を通読するとき、西洋の読者は、主要登場人物たちの感情や物腰、振舞、声、しぐさ、表情のよくてきた描写を得ることになる。しかし、いくら探しても、登場人物たちの身体の描写を見いだすことはないであろう。仮に絵巻を取り出し、身体の絵画的表現を吟味してみても、事はさして改善されないであろう。リアルな、それと認識される顔つきを探そうとして、彼が会うのは、あいまいな、ただ約束事に従って描かれた表情なのである。人間はここでは身体というより、情動であり、「雰囲気」、物腰、佇まい、色合いであり、つまりは、読者の精神中に感覚知覚を通じて喚起されるものなのである。こうして西と東とでは、身体が、あるいは身体の一部が、知覚され、概念化され、表現され、使用される仕方は、根本的に異なっている。東では、身体 (顔を別として) をことばで描写したり図像で表現する際、とかく、あいまいに、ただ約束事に従うことで済ませることが多い。他方、西のやり方では、反対に、個別化され、リアルで、的確であることが求められるのである。その根本的な違いは、身体を巻き込む他のあらゆる領域で確認される。すなわち、宗教上の信念や実践 (清め、汚れ、死)、性差や社会性 (衣装、しぐさ、態度、物腰)、治療法 (不健康、病気)、舞台芸術、武術といった領域で確認される。それだけではなくもっと短命な現象、エロティックなあるいはセクシャルな行為、娯楽的な諸現象においてもそうなのである。[Pandey、小秋元、小林、Kyburz、パップ、Dolce、Cadot、山中・岩月]

さらに精査を行なっていけば、同じく根本的な違いが、日本の近代化にもかかわらず、その近代日本を貫いて、やはり現代に至るまで維持されていることが確認されるのである。[パップ、Ackermann、川田、安孫子、Ebi、Steineck]

こうして、どのような角度を選びそこから身体を眺めても、たんなる表面的現れを超えた西と東との違いを、われわれは確認していくことになる。人体は、そして人間は、西と東とで異なったものとしてある。こうしてシンポジウムでは広く東西比較の視点から、日本における人体観・人間観のさまざまな現れが、さまざまに突き合わされ、吟味されていった。人間身体論の大きさと複雑さにもかかわらず、いやむしろその大きさ複雑さゆえに、今回のアルガス・シンポジウムでも、国際的でありかつ学際的であるという、国際日本学の方法論の力強さと有用性が改めて確認されていったと考える。プログラムの詳細を含め、議論の細部を近刊の報告集でぜひ確認していただきたい。

【記事執筆：安孫子 信】

(法政大学国際日本学研究所所長・文学部教授)

Academic Frontier Sub-project 1: Developing 'International Japanese Studies' as Research on an 'Other' Culture

International Japanese Studies Symposium: 'Body and Embodiment'

Date Sunday, 1 November - Tuesday, 3 November 2009
 Venue Centre Europeen D'Etudes Japonaises D'Alsace (Kientzheim, France)
 Sponsors Hosei University Research Center for International Japanese Studies, French National Centre for Scientific Research (UMR8155), Strasbourg University Japanese Faculty, Centre Europeen D'Etudes Japonaises D'Alsace

This symposium consisted of 16 presentations by eight participants from Japan and eight participants from Europe. We discussed the Japanese view of the body from ancient times to the present day, and not just within the

so-called high culture of religion, ethics, literature, art and drama, but also within sub-cultures such as Manga and pornographic images. Furthermore, reflections of the body view were sought not merely in defined aspects of society such as medicine and education, but also in everyday language and physical behaviour etc.: in other words, the basic structure of society itself. Investigations started out from these areas, and returned to the following fundamental issues concerning the Japanese view of the body. There is a tendency to consider the body as having some sentimental and human relatedness or even sacredness, and in that respect it opposes the Western view of the body which aims to draw a sharp line between mind and body. However with the age of modernization, the Western view of the body was accepted without much difficulty, and yet the traditional view of the body was never abandoned. What might be called the flexible structure of the Japanese view of the body was thus brought out through this symposium.

Report by ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

学术事业推进项目① 构筑以异文化研究为视角的“国际日本学”
 国际日本学学术研讨会
 “人体与身体性”

时间：2009年11月01日(周日) -11月03日(周二)
 地点：阿尔萨斯欧洲日本学研究所 (法国·肯兹海姆)
 主办单位：法政大学国际日本学研究所、法国国立科学研究生院 (UMR8155)、斯特拉斯堡大学日本学部、阿尔萨斯欧洲日本学研究所

在此次学术研讨会上，来自日本的8位研究人员和来自欧洲的8位研究人员分别做了16场学术报告，从宗教·伦理·文学·美术·戏剧等主流文化的角度和漫画、

黄色图画等非主流文化的角度，对日本人自古以来的人体观进行了全面地讨论。在此基础上，与会者还从医疗、教育等特定的社会场景和日常用语、日常形体动作等基础的社会场景，探讨了日本人人体观的外在反映。会议以上述研讨为出发点和落脚点，得出根本结论认为，日本人人体观的特征在于将人体视作一种感情、一种人际关系以及一种带有某种神圣性的物质。虽然日本人人体观的这一特征，与严格将身心区分开来的西方人体观大相径庭。但是在近代化的过程中，西方的人体观并未受到太多阻力就为日本人所接受了。而在接受西方人体观的同时，日本人又没有抛弃掉自身传统的人体观。因此可以说，日本人的身体观具有着一种独特的软构造。

【执笔者：安孙子 信
 (法政大学国际日本学研究所所长·文学部教授)】

학술 프론티어 서브프로젝트① 이문화 연구로서의「국제 일본학」의 구축

국제일본학 심포지움: 「인체와 신체성」

· 일 시 2009년 11월 1일 (일) ~11월 3일 (화)
 · 장 소 알자스 구주 (欧州) 일본학연구소 (프랑스 킨츠하임)
 · 주 최 호세이대학 (法政大学) 국제일본학연구소, 프랑스 국립과학연구학원 (UMR8155), 스트라스부르 (Strasbourg) 대학 일본학부, 알자스 구주 일본학연구소

이번 심포지움에서는 일본에서 참가한 8명과 유럽에서 참가한 8명, 합계 16명이 일본인의 인체관에 대해 발표했다. 고대에서부터 현대에 이르기까지 종교·윤리·문학·미술·연극 등, 고급문화뿐만 아니라 만화나 외설적인 그림과 같은 서브 컬처에 나타나

있는 인체관에 관해서도 언급되었다. 또한, 그와 같은 인체관이 의료나 교육과 같은 사회의 특정 분야뿐만 아니라 일상 언어나 일상적인 신체 동작과 같은, 이른바 사회의 기초구조 그 자체에 어떻게 반영되어 있는지에 관해서도 탐구되었다. 이와 같은 제반 사항들을 음미하는 것로부터 출발하여 귀착된 근본 문제는, 일본인의 인체관은 인체를 감정이나 인간의 관계성, 나아가 성스러움을 지닌 것으로 간주하는 경향을 띠고 있다는 점, 그 결과 심신 이원론을 근본으로 하는 서양의 인체관에 대립하는 것이라는 점, 그럼에도 불구하고 근대화 과정에 있어서 이러한 서양의 인체관이 큰 곤란 없이 받아들여졌다는 점, 아울러 서양의 인체관을 받아들이면서도 전통적인 인체관을 버리지 않았다는 점 등으로 집약된다. 이번 심포지움을 통해 일본인의 인체관이 갖고 있는 유연성이 명백해졌다.

【기사 집필: 아비코 신 (安孫子 信,
 호세이대학 국제일본학연구소 소장·문학부 교수)】

総括シンポジウム

『古代末期の境界世界 — 石江遺跡群と城久遺跡群を中心として —』

- 日 時：2009年11月14日（土）12時30分～19時00分
2009年11月15日（日）9時00分～16時00分
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館4階844教室
- 司 会：ヨーゼフ・クライナー（法政大学国際日本学研究所兼任所員・特任教授）

文部科学省高度化推進事業・学術フロンティア・プロジェクト「異文化研究としての〈日本学〉」のサブプロジェクト③「日本の中の異文化」は、平成19年度以来、三年間にわたって、古代から中世にかけて、8世紀から12、13世紀に至るまでの間、律令国家の北と南の周辺（国境）に起きた異民族文化との接触のあり方の比較研究に努めてきた。具体的に北辺の代表的な、また近年に注目を集めた発掘調査の例として青森県の石江遺跡群、就中新田（ニッタ）遺跡、またそれに対して南辺で奄美大島喜界島の城久（グスク）遺跡群を選んだ。それぞれ、地元の発掘担当者またその発掘成果の解釈に携わった研究者を、一回は自らの調査現場で、一回は他の調査地に集まって、法政の研究者も合流し、討論していただいた。すでにこの段階で比較の観点の導入により、この両方の遺跡群の類似または相違点がうかがいあがってきたようである。

今回の総括シンポジウムでは東京大学大学院人文社会科学系研究科教授、村井章介先生の記念講演「古代末期の北と南」で改めてこのプロジェクトの問題を定義していただいた後、各セッションの冒頭に吉成直樹（南方研究グループ責任者）と小口雅史（北方研究グループ責任者）両法政大学教授に古代末期の南辺・北辺の

世界事情を描写していただいた。それに引き続いて発掘担当者（城久については喜界町教育委員会の澄田直敏氏、新田については青森教育委員会の木村淳一氏）が、遺跡の特質を報告、何人かの先史・考古学、古代史や宗教・社会史の専門家が今までに行った分析の結果をまとめた。

最後の総括討論では特に石江遺跡群との関係で、そこで出土した祭記具（仏教ないしシャーマニズム関係か）や周辺の渤海（ポイイ）国との接触の可能性について論じられた。

城久遺跡との関係では朝鮮半島、九州 — 就中北部九州や大宰府 — や南西諸島の他の島々との交流及び琉球王国の前史にまつわる諸問題が、会場の参加者の意見・質問も取り入れて熱心に討論されて、大きな成果を収めることができた。また、この総括シンポジウムの報告や討論並びにその準備段階でのいくつかの研究会で発表された貴重な論文も含めて、21年度内に一冊にまとめ、出版に向けて準備を進めている。

【記事執筆：ヨーゼフ・クライナー
（法政大学国際日本学研究所兼任所員・特任教授）】

Academic Frontier Sub-project 3: Other Cultures within Japan

General Symposium “Boundaries in the World of the Late Ancient Period: centering on the Ishie and the Gusuku Groups of Remains”

Date Saturday, 14 November 2009, 12:30-19:00
Sunday, 15 November 2009, 9:00-16:00
Venue Hosei University Ichigaya Campus, Classroom 844
Chair Josef KREINER (Special Adviser, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Special Professor, Hosei University)

Sub-project 3 “Other Cultures within Japan” has been engaged over the three years since 2007 in comparative research into the nature of contact with other ethnic cultures at the northern and southern extents of the Ritsuryo State (central administrative state) from the 8th century into the 12th, 13th centuries. For this purpose we chose the Ishie group of remains in Aomori Prefecture,

representative of the northern area and whose excavation has drawn attention in recent years, and to compare with it, the southern area Gusuku group of remains of Kikai-jima, on Amami Oshima Island.

On the occasion of this general symposium, University of Tokyo Professor, MURAI Shosuke’s commemorative lecture re-defined the issues of the project for us, and then at the start of each session, Hosei University Professors YOSHINARI Naoki (head of the Southern Research Group) and OGUCHI Masashi (head of the Northern Research Group) described circumstances in the southern and northern areas at the end of the ancient period. Following this, excavation leaders (for Gusuku, SUMITA Naotoshi of the Kikai-cho Board of Education, and for Ishie, KIMURA Jun’ichi of the Aomori City Board of Education) reported on the characteristics of the remains, and specialists in prehistory, archaeology, ancient history, religious and social history summarized the results of their previous analyses.

We are preparing for the publication in one volume of the reports from this symposium.

Report by Josef KREINER (Special Adviser, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Special Professor, Hosei University)

学术开拓推进项目③日本中的异文化 综合研讨会“古代末期的边境世界 — 以 石江遗迹群和城久遗迹群为中心”

时 间：2009年11月14日(周六) 12:30-19:00
2009年11月15日(周日) 09:00-16:00
地 点：法政大学市ヶ谷校区 58年馆 4层 844教室
主持人：约瑟夫·库拉伊那(法政大学国际日本
学研究所兼任所员·特任教授)

公元8世纪至12、13世纪，律令国家与兴起于其南北周边的异民族文化进行了大量的接触和交往。学术开拓推进项目③“日本中的异文化”项目自平成19年(2007年)开始以来，三年间始终致力于对这种接触和交往的方式和内容进行比较研究。该项目所选取的研究对象分别是青森县的石江遗迹群和奄美大岛喜界岛的城久(音GUSUKU)遗迹群。石江遗迹群是日本北方地区具有代表性的遗迹群，其发掘调查工作近年来也备受瞩目。

目。与此相对，城久遗迹群则是日本南方地区具有代表性的遗迹群。

在此次综合研讨会上，东京大学教授村井章介先生在纪念演讲中首先再次对该项目的课题进行了定义。随后，在各分段研讨的时间段里，首先分别由法政大学的吉成直树教授(南方研究小组负责人)和小口雅史教授(北方研究小组负责人)对古代末期的南方·北方边界的情况进行了描述，然后分别由发掘负责人(城久遗迹群的负责人为喜界町教育委员会的澄田直敏先生、石江遗迹群的负责人为青森教育委员会的木村淳一先生)就遗迹的特征进行报告，最后由数名远古史·考古学、古代史以及宗教·社会史等领域的专家对迄今为止的分析结果进行总结。

另，此次研究会的报告已经收为一册，相关的出版工作也正在顺利进行。

【执笔者：约瑟夫·库拉伊那

(法政大学国际日本学研究所兼任所员·特任教授)】

학술 프론티어·서브 프로젝트③ 일본 속의 이문화

총괄 심포지움 『고대 말기의 경계 세계 — 이시에 (石江) 유적군과 구스쿠 (城久) 유적군을 중심으로 —』

- 일 시 2009년 11월 14일(토) 12시 30분 ~ 19시 00분
2009년 11월 15일(일) 9시 00분 ~ 16시 00분
- 장 소 호세이대학 이치가야 캠퍼스 58년관 4층 844교실
- 사 회 요셉 크라이너(호세이대학 국제일본학연구소 겸담 소원·특임 교수)

서브 프로젝트③「일본 속의 이문화」는 헤이세이(平成) 19년(2007년)부터 3년에 걸쳐서, 8세기부터 12~13세기에 이르는 동안 울릉국가의 북쪽과 남쪽의 주변에서 일어난 이민족 문화와의 접촉 형태를 비교 연구해 왔다. 최근 주목받고 있는 북쪽 변방의 발굴 조사 예로서 아오모리현(青森縣)의 이시에 유적군과, 이와 반대되는 예로서 남쪽 변방의 아마미오

시마(奄美大島) 기카이시마(喜界島)의 구스쿠(城久, 가스쿠) 유적군을 선택하여 비교했다.

이번 총괄 심포지움에서는 도쿄(東京) 대학 교수인 무라이 쇼스케(村井章介) 씨의 기념 강연을 통해 「일본 속의 이문화」 프로젝트를 전개하는 과정에 필요한 문제를 새롭게 정의했다. 그 후 진행된 각 세션의 시작에서는 호세이대학 교수인 요시나리 나오키(吉成直樹, 남방 연구 그룹 책임자) 씨와 역시 호세이대학 교수인 오구치 마사시(小口雅史, 북방 연구 그룹 책임자) 씨에 의한 고대 말기의 남쪽과 북쪽 변방의 당시 상황에 대한 설명이 있었다. 이 설명에 이어, 구스쿠 유적군의 발표를 맡은 스미다 나오토시(澄田直敏) 씨와 이시에 유적군의 발표를 맡은 키무라 준이치(木村淳一) 씨가 각 유적의 특징에 관해서 설명했다. 또한, 두 발표자는 선행 연구, 고고학, 고대 역사, 종교 및 사회사의 전문가들이 지금까지 연구한 내용을 분석해 결과를 정리했다.

이번 심포지움의 내용을 종합하여 한 권의 책으로 출판하기 위한 준비가 추진 중이다.

【기사 집필：요셉 크라이너

(호세이대학 국제일본학연구소 겸담 소원·특임 교수)】



研究会会場発表の様子(総括討論)



会場の様子

国際シンポジウム

「—— 日本にとって沖縄とは何か —— 沖縄史の三つの転換期を再考する」

～薩摩琉球入り・侵攻 400 年、琉球処分 130 年、沖縄復帰～

- 日 時：2009 年 12 月 19 日（土） 13 時 00 分～ 18 時 30 分
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス ポアソナード・タワー 26 階 スカイホール
- 共 催：財団法人沖縄協会 International Association of Ryūkyuan and Okinawan Studies IAROS
(国際琉球・沖縄学会)

慶長 14 年（1609 年）春、薩摩藩が鉄砲隊をはじめ、3,000 余の軍隊を率いて奄美大島本島と徳之島をへて沖縄・琉球王国の中心地首里城を攻めた。尚寧琉球国王は首里城を開け渡して、自ら人質になって鹿児島に連行され、掟 15ヶ条で島津氏に従属を誓った。これで琉球は江戸時代の幕藩体制に組み入れられ、奄美は完全に薩摩の「植民地」化した、と普通は解釈されている。沖縄の歴史のながれを大きく変えたこの転期の 400 周年を記念して沖縄、奄美、鹿児島、ソウル国立大学等、日本国内外で 30 以上の研究会・シンポジウムや特別展が開催された。沖縄研究の長い伝統を誇る法政大学はこの一連の催しものを受けて、また今年からちょうど 130 年前の明治 12 年（1879）に起こったいわゆる「琉球処分」（琉球が沖縄県の形で近代国民国家日本に併合された事件）、そして昭和 47 年（1972）アメリカ統治から再び日本に復帰したことを合わせて、三つの沖縄史の大きな転期を再考、現在日本及び沖縄が直面しているさまざまな問題をよりよく理解するために国際シンポジウムを開いた。主催は沖縄文化研究所並びにその第③サブ・プロジェクトで「日本の中の異文化」問題を取り上げている国際日本学研究所で、共催としては財団法人沖縄協会及び国際琉球・沖縄学会の協力を得た。沖縄は現在注目を浴びており、テーマも非常に興味のあるものにもかかわらず、東京ではまだ公に取り上げられ議論されていなかったこともあり、約 130 人もの参加者が集まり大きな成功をおさめることができた。

法政大学学事顧問 清成忠男名誉教授の開会の挨拶の後、紙屋敦之（早稲田大学文学学術院教授）及び真栄平房昭（神戸女学院大学文学部総合文化学科学科教授）は、島津氏の琉球侵略を取り上げ、歴史学で今まであまり注目されなかったいくつかの問題点を強調した。

例えば、尚寧王は、駿府や江戸城で徳川家康・秀忠に独立王国の支配者としての待遇を受け、家康が島津氏に対して琉球王国を取りつづさないよう厳しく令を下した（紙屋）、また琉球では引き続き女性にも知行を与えられたこと（真栄平）等で、琉球は完全に幕藩体制に組み入れられないで、むしろその「異」質性ないし特質が認められた。

ヴェネツィアのカ・フォスカリ大学東アジア学科教授で国際日本学研究所の客員所員のローザ・カーロリは、琉球の最後の国王尚泰が琉球処分で演じた役割を分析、普通悲劇的な王としてロマン的に描かれているのに対して、自分の歴史的役割を十分認識し、自らの決断でそれを果たした「政治家」としての像を抉り出した。元琉球銀行での勤務や副県知事としての豊かな経験をふまえて、牧野浩隆（沖縄県立博物館・美術館館長）は、戦後アメリカの対日・対沖縄占領政策を基礎としている現在の沖縄経済の事情を明らかにした。

最後には、ヨーゼフ・クライナー（法政大学国際日本学研究所兼任所員・特任教授）と我部政明（琉球大学法文学部教授）は、琉球・沖縄のアイデンティティを論じ、日本史学や民俗学・文化人類学がそれいかに影響をおよぼし形づけてきたか（クライナー）、あるいはまた戦後 65 年はいかに記憶されているか（我部）について言及し、討論は最終的に普天間移転問題までに及んだ。

このシンポジウムの成果は、できればその他、早稲田、立教、琉球の各大学で行われた今年の講演等も含まれた形で来年度に出版・発表する予定である。

【記事執筆：ヨーゼフ・クライナー

（法政大学国際日本学研究所兼任所員・特任教授）】



会場の様子



研究会場発表の様子（総括討論）



研究会場発表の様子

ローザ・カーロリ 教授（ヴェネツィア カ・フォスカリ大学教授、国際日本学研究所客員所員）

Hosei University Institute of Okinawan Studies, and Research Center for International Japanese Studies

International Symposium

“From Japan’s Perspective, What is Okinawa? — Reconsidering Three Turning Points in Okinawan History”: Satsuma Invasion of Ryūkyū of 400 years ago, the Annexation of Ryūkyū of 130 years ago, the Return of Okinawa

Date Saturday, 19 December 2009, 13:00-18:30

Venue Hosei University Ichigaya Campus, Boissonade Tower 26F Sky Hall

In the 14th year of Keicho (1609), Satsuma Fief conscripted an army of more than 3000, and, advancing by way of Amami Oshima, invaded Shuri Castle at the centre of the Kingdom of Ryūkyū. Sho Nei, the king of Ryūkyū, gave up Shuri Castle, becoming a hostage of his own ac-

cord and being taken to Kagoshima, where he vowed obedience to the 15 Laws of the Shimazu Clan. Thus Ryūkyū became incorporated into the Edo-period Bakuhhan (feudal) regime, or so it is usually interpreted. To commemorate the 400 years since this turning point which was to greatly change the course of Okinawan history, over 30 research meetings etc. were held within and outside Japan. Hosei University hosted one of these series in the form of an international symposium which combined this with the “Ryūkyū Annexation” of Meiji 12 (1879) and its return to Japan from American control in Showa 47 (1972), in order to reconsider these three major turning points in Okinawan history, and to better understand the various issues confronting present-day Japan and Okinawa.

It is hoped that the outcome of the symposium will be published and presented in the coming year in combination with the lectures etc. held during this year at, among others, Waseda, Rikkyō and Ryūkyū Universities.

Report by Josef KREINER (Special Adviser, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Special Professor, Hosei University)

法政大学沖縄文化研究所・国際日本学研究所
国際研究会

“沖縄对于日本意味着什么 — 对于沖縄历史三个转折期的再思考”

~薩摩藩入侵琉球 400 年、清政府被迫放弃琉球 130 年、美国交还沖縄主权~

时 间：2009 年 12 月 19 日 (周六) 13 : 00-18 : 30

地 点：法政大学市ヶ谷校区布瓦索纳德大楼 26 层
大会议室

庆长 14 年 (公元 1609 年), 薩摩藩率领军队 3000 余人经奄美大岛攻陷沖縄・琉球王国的中心城市首里城。琉球国王尚宁开城投降, 并被作为人质带回鹿儿岛, 随后发誓效忠岛津氏。一般认为, 琉球自此开始被纳入到江户时代的幕藩体制之内。今年, 为了纪念这一彻底改

变沖縄历史走向的事件发生 400 周年, 在日本国内外共举行了 30 场以上的研究会。而法政大学在吸收这一系列活动的基础上, 将这一历史事件与明治 12 年 (公元 1879 年) 发生的清政府被迫放弃琉球事件及昭和 47 年 (公元 1972 年) 发生的美国向日本政府交还沖縄主权一事结合起来, 举办了此次国际研讨会, 其目的就在于通过对沖縄历史上的三个重大转折期进行再思考, 来加深人们对于目前日本及沖縄所面临的各种问题的理解。

此次研讨会的成果预计将会于明年发表出版。如有可能, 届时出版的内容中将包括早稻田大学、立教大学、琉球大学等其他各大学今年所举办的演讲会的内容和成果。

【执笔人：约瑟夫·库拉伊那

(法政大学国际日本学研究所兼任所员・特任教授)】

호세이대학 (法政大学) 오키나와 (沖縄)
문화연구소・국제일본학연구소

국제 심포지움

「—일본에게 오키나와는 무엇인가—

오키나와 역사상 세 차례의 전환기를 재고하다」

~사즈마 (薩摩) 의 류큐 (琉球) 진입・침공 400 년,
류큐 처분 130 년, 오키나와 복귀~

· 일 시 2009년 12월 19일 (토) 13시 00분~
18시 30분

· 장 소 장소 : 호세이대학 이치가야 캠퍼스
보아소나드타워 26층 스카이하울

케이쵸 (慶長) 14 년 (1609 년), 사즈마한 (薩摩藩) 이 3,000 여 명의 군대를 이끌고 아마미오시마 (奄美大島) 를 거쳐 오키나와・류큐왕국의 중심지인 수리성 (首里城) 을 공격했다. 쇼네 (尚寧) 류큐국왕은 수리성을 내주고 스스로 인질이 되어 가고시마 (鹿兒島) 로 이송된 후, 법제 15 개조에 의거해 시마즈 (島

津) 씨에게 종사할 것을 맹세했다. 이 일을 계기로 류큐는 에도 (江戸) 시대의 막번 체제에 편입되었다, 고 보통은 해석되고 있다. 오키나와 역사의 흐름을 크게 바꾼 전환 400 주년을 기념하여 일본 국내외에서 30 회 이상의 연구회가 개최되었다. 호세이대학은 이와 같은 일련의 행사에 동참하고자 메이지 (明治) 12 년 (1879 년) 에 발생한 「류큐 처분」 과 쇼와 (昭和) 47 년 (1972 년) 미국의 통치에서 다시 일본으로 복귀한 것 등 모두 세 번에 걸친 오키나와 역사상의 대전환점을 재고하여, 현재 일본과 오키나와가 직면해 있는 여러 가지 문제를, 보다 정확하게 이해할 수 있는 계기를 마련하기 위해 국제 심포지움을 개최했다.

이번 심포지움에서 얻은 성과는 가능한 한 와세다 (早稻田) 대학, 릿쿄 (立教) 대학, 류큐대학 에서 열린 강연의 내용도 포함시켜 올해 안으로 출판・발표할 예정이다.

【기사 집필 : 요셉 크라이너

(호세이대학 국제일본학연구소 겸담 소원・특임 교수)】

学術フロンティア・サブプロジェクト① 異文化研究としての「国際日本学」の構築

2009 年度アルザスシンポジウム（人体と身体性）に向けての 第 1 回勉強会

「身体と姿勢：東アジアの伝統の中で」

- 報告者：アンヌ・ゴッソ（ボルドー第 3 大学准教授 / フランス国立科学センター・外務省共同研究所研究員）
- 日 時：2009 年 7 月 4 日（土）18 時 00 分～20 時 00 分
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所 セミナー室
- 司 会：安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所長・文学部教授）

2009 年 7 月 4 日（土）、18 時から 20 時過ぎまで、法政大学市ヶ谷キャンパス国際日本学研究所セミナー室において、「2009 年度アルザス・シンポジウム（人体と身体性）に向けての第 1 回勉強会」が開かれた。今回はフランス・ボルドー第 3 大学准教授で日仏会館研究員として現在滞日中のアンヌ・ゴッソ先生から、「身体と姿勢：東アジアの伝統の中で」というテーマでレクチャーをしていただいた。レクチャーと質疑への応答は、日本語で行われた。

内輪の勉強会ということもあって 10 名ほどの参加者であったが、古代から現代に至る日本人の身体観の変遷を、「座る」という動作・姿勢に絞って、中国や西洋との比較で詳しく説明していただいた。豊富な資料の紹介と分析に基づく説明は、たいへん啓発的で、多くを教えていただいた。

すなわち、「座る」ということが大きく「床に座る」と「椅子に腰かける」とに区別されるとして、生活・文化に関わる多くを中国から学んできた日本が、ここでは中国に従わず、独自路線を取ってきたことがまず指摘された。中国では 10 世紀から主流であった「椅子に腰かける」が、日本で広く行われるようになるのは千年後の 20 世紀になってからなのである。歴史的に見た場合の、「椅子に腰かける」ことへのこの日本人の「ためらい」は、いまだ十分には説明がなされていない。

ことばの上からも「腰かける」に対して「座る」は、「存在する場所」の意味を含み、安定・安心・自

由・快適の感がそこに結びついている。しかし実際には「座る」にも多々あって、先行研究はそこに、「ひざまずく」、「床に臀部をつける」、「しゃがむ」の三つを区別している。そして「ひざまずく」に属し、「尊敬と礼儀作法の姿勢」として古代に中国から導入された「正坐」は、身体を強く拘束するものでありながら、日本では作法にかなう「真の坐位」として定着していったのである。

他方で「腰かける」もことばの上では 15 世紀にすでに確認されるし、広義の「椅子」の存在も、中国からの影響以前の古代 3 世紀に確認されるのである。その後、中国からの影響で 5 世紀から 8 世紀にかけて、さらに西洋との関わりで 16 世紀の終わりからしばらくは、「椅子」の使用が広がることも起こるが、しかしそれは「床几」といった「交椅」や「縁台」といった屋外ベンチの使用以外は、永続的なものとはならなかった。「椅子」が室内で広く使用されていくのは、結局は、明治維新以降の、西洋からの影響の決定的な受け入れを待たねばならなかったのである。

以上、今回の勉強会では、「座る」という小さな動作が、日本人の身体観やさらには日本文化の特質を語る際に、独特の、きわめて重要な位置を占める問題であることを、ご教示いただいたのである。

【記事執筆：安孫子 信

（法政大学国際日本学研究所所長・文学部教授）】



アンヌ・ゴッソ 氏



会場の様子①



会場の様子②

Academic Frontier Sub-project 1: Developing 'International Japanese Studies' as Research on an 'Other' Culture

1st Study Meeting in Preparation for the 2009 Alsace Symposium "Body and Embodiment"

"Body and Pose: within the East Asian Tradition"

Speaker Anne GOSSOT (Associate Professor, University of Bordeaux 3; Researcher, French National Centre for Scientific Research, and Ministry of Foreign Affairs Joint Institute)

Date Saturday, 4 July 2009, 18:00-20:00

Venue Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F, Research Center for International Japanese Studies seminar room

Chair ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

"Sitting" can be largely categorized into the "sitting on the floor" and the "sitting in a chair". In contrast to China, which widely introduced the "sitting in chairs" during the 10th century, Japan showed "hesitation" for a long time towards "sitting in chairs", continuing its allegiance to "sitting on the floor". We can say that it was once having entered the 20th century, and under the influence of Western civilization, that Japanese first widely accepted the "sitting in chairs". Tracing historically this hesitation towards "the chair" is an immensely important and fascinating task when considering Japanese people's body view, and, indeed, the characteristics of Japanese culture itself.

Report by ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

学术开拓推进项目①
 构筑以异文化研究为视点的国际日本学
 面向 2009 年度阿尔萨斯·“人体与身体性”
 研讨会的第 1 次学习会
 “东亚传统中的身体与姿势” (Corps et
 postures : notes sur l'Asie orientale)

报告人 : 安鲁·格索 (波尔多第 3 大学副教授、法国
 国立科学中心·外务省共同研究所研究员)
 (Anne Gossot : Maître de conférence
 de l'Université Bordeaux 3, Chercheur
 à la Maison franco-japonaise à Tokyo)
 时 间 : 2009 年 07 月 04 日 (周六) 18 : 00-20 : 00
 地 点 : 法政大学市ヶ谷校区 58 年馆 2 层国际日
 本学研究所研究室

主持人 : 安孙子 信 (法政大学国际日本学研究所
 所长·文学部教授)

“坐”这个动作,大致上可以分为“席地而坐”和
 “临椅而坐”两种。自公元 10 世纪开始,中国就已经广
 泛地在生活中使用椅子作为坐具。与此相对的是,日本
 固执地保持了“席地而坐”的生活习惯,对于是否使用
 椅子始终是颇为踌躇。可以说,直到进入 20 世纪之后,
 日本人才开始在西洋文明的影响下,开始逐渐习惯坐到
 椅子上。因此,用历史的眼光去回顾日本人对于“椅
 子”的接纳过程,对于了解日本人的身体观甚至日本文
 化的某些特质都具有极其重要的意义。

【执笔人 : 安孙子 信
 (法政大学国际日本学研究所所长·文学部教授)】

학술 프론티어 서브프로젝트①
 이문화 연구로서의 「국제 일본학」의 구축
 2009 년도 알자스 심포지움 「인체와 신체
 성」에 관한 제 1 회 연구회
 「신체와 자세 : 동아시아 전통 안에서」
 (Corps et postures : notes sur l'Asie
 orientale)

· 보고자 앙느 고티외 (보르도 제 3 대학 준교수 /
 프랑스 국립과학센터·외무성 공동연구소
 연구원) (Anne Gossot : Maître de conférence
 de l'Université Bordeaux 3, Chercheur à la
 Maison franco-japonaise à Tokyo)
 · 일 시 2009 년 7 월 4 일 (토) 18 시 00 분 ~ 20 시 00 분
 · 장 소 호세이대학 (法政大学) 이치가야
 캠퍼스 58 년관 2 층
 국제일본학연구소 세미나실

· 사 회 아비코 신 (安孫子 信, 호세이대학
 국제일본학연구소 소장·문학부 교수)

「앉는다」라는 말은 크게 「바닥에 앉다」와 「의자
 에 걸터앉다」로 구별된다. 10 세기에는, 주로 「의
 자에 걸터앉다」라는 표현을 사용했던 중국과는 달
 리, 일본은 오랫동안 「의자에 걸터앉다」라는 용어의
 사용을 주저하는 반면, 「바닥에 앉다」라는 표현을
 고집해왔다. 일본인이 「의자에 걸터앉다」라는 표현
 을 일반적으로 사용하게 된 것은, 서양문명의 영향으
 로, 20 세기에 들어서부터라고 할 수 있다. 일본인
 이 「의자」라는 용어 사용을 “주저”하게 된 역사적
 연원을 살피는 것은, 일본인의 신체관이나, 나아가
 일본문화 고유의 특질을 이해하는데 있어서, 지극히
 중요하고, 또한 흥미있는 일이다.

【기사 집필 : 아비코 신 (安孫子 信,
 호세이대학 국제일본학연구소 소장·문학부 교수)】

2009年度アルザスシンポジウム（人体と身体性）に向けての 第2回勉強会

「人体を総合的に考える — 文化を生む人間・文化に条件づけられる人間」

- 報告者：川田 順造（人類学者、神奈川大学日本常民文化研究所客員研究員）
- 日 時：2009年7月24日（金）18時00分～20時00分
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス ポアソナード・タワー25階 B会議室
- 司 会：ヨーゼフ・クライナー（法政大学国際日本学研究所兼任所員・特任教授）

2009年7月24日（金）、18時から20時過ぎまで、法政大学市ヶ谷キャンパス・ポアソナード・タワー25階 B会議室において、「2009年度アルザスシンポジウム（人体と身体性）に向けての第2回勉強会」が開かれた。今回は日本を代表する人類学者である川田順造先生から、「人体を総合的に考える—文化を生む人間・文化に条件づけられる人間」というテーマでレクチャーをしていただいた。内輪の勉強会ではあったが外部からの聴講者も多数で、質疑応答を含めて、予定時間を大きく超える会となった。

川田先生の気宇大きくかつ含蓄深いお話の流れは、先生ご自身の「発表概要」に明示されている。ここでは「三つの側面」から「人間と文化」を扱うと述べられておられた。

第一の側面：「ヒトの身体が、哺乳動物としては稀な長い樹上生活と、他の霊長類から分かれて地上に降りての、700万年来の直立二足歩行に伴うどのような特徴によって、他の動物と異なる文化を生んだかについて考える。ここでは、ヒト一般とヒトの文化一般が問題となる」。ここでは、数例を上げれば、樹上生活によってモノを掴む力や、上肢の可動性が得られたこと、また二足歩行によってはモノを運ぶことや、声帯が下がり構音器官が発達したことなどが語られた。

第二の側面：「その文化の力によって、12～15万年からアフリカを旅立って世界の多様な地域に拡散し、多様な文化を生み出したヒトの身体が、同時に自分たちが生み出した文化によって、いかに条件づけられてもいるかを問題にする。ここでは、複数のヒトの群れと複数の文化の相互関係について、とくに私の提唱してきた〈文化の三角測量〉の方法によって、日本・フランス・西アフリカ（とくに旧モシ王国）の事例を中心に、…お話しする」。今回のレクチャーの中心部分で、先生ご自身が撮られた写真資料を豊富に用

いてのお話は圧巻であった。心理学が言う「手続き的記憶」によって身体は文化の記憶を蓄積していき、異なる文化は異なる「身体技法」を形成していく。おふくろの味と呼ばれるような特有な味覚が形作られる、一定のことばを視覚・聴覚が見分け・聞き分けるようになるといったことから始め、ダンスの仕方や、農工作業とそこでの道具の使い方に至るまで、異なる文化の背後にあるのは、文化が生む異なる「身体技法」なのである。

第三の側面：「社会的存在としての人間が、どのように異なったやり方でとらえられてきたか」。このように形成された「身体技法」は、それを共有する人間集団の集団性をも規定していく。上げられていた例で言えば、個よりも集団への帰属が優先する日本社会では、たとえば「アイデンティティ」といった言葉は翻訳不可能にとどまる、といったことにもなるのである。

このように、一見して限界づけの役割も持つとはいえ、個々の文化の在り方をグローバル化の名の下で消し去り平準化していくような傾向は容認できない、それが締めくくりとして先生が述べられたことであった。先生に従えば、文化はグローバルな力がやがては飲み込んでいくであろう、ただローカルなものとは見なされてはならないのであり、個々の文化はその特殊性において普遍的な価値を持つとむしろ考えてゆかねばならないのである。

以上、今回の勉強会では、身体の問題が実は文化の問題の中心に位置づくということ、つまり、今更ながらではあるが、身体論の根本意味について、たいへん貴重なご教示をいただいたわけである。

【記事執筆：安孫子 信

（法政大学国際日本学研究所所長・文学部教授）】



川田 順造 氏



会場の様子

Academic Frontier Sub-project 1: Developing 'International Japanese Studies' as Research on an 'Other' Culture

2nd Study Meeting in Preparation for the 2009 Alsace Symposium "Body and Embodiment"

"General Thoughts on the Human Body: Humans Shaping Culture, Humans Imposing Conditions upon Culture"

Speaker KAWADA Junzo (Anthropologist; Visiting Researcher, Institute for the Study of Japanese Folk Culture, Kanagawa University)
 Date Friday, 24 July 2009, 18:00-20:00
 Venue Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 25F Conference Room B
 Chair Josef KREINER (Special Adviser, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Special Professor, Hosei University)

Why should Japanese Studies, which is above all an academic discussion of culture, raise the issue of the human body? This was the question answered for us by Professor Kawada, leading Japanese anthropologist, at this study meeting. First of all we can say that people possess a culture that is based around the characteristic features of the body functions involved in walking on two feet, and that different cultures grow from subtle differences in the use of those body functions. Culture, having been formed in this way, then poses conditions upon the human body of individuals belonging to a shared society by way of customs in "body techniques", ranging from the vocalization of language to methods of dancing and working etc. The body shapes culture, and culture shapes the body. The main thrust of Professor Kawada's argument is, thus, that body theory itself must form the basis of any cultural theory.

Report by ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

学术开拓推进项目①
 构筑以异文化研究为视点的国际日本学
 面向 2009 年度阿尔萨斯·“人体与身体性”
 研讨会的第 2 次学习会
“对人体的综合性思考—人育文化·文化育人”

报告人：川田 顺造 (人类学者、神奈川大学日本
 常民文化研究所客员研究员)
 时 间：2009 年 07 月 24 日 (周五) 18 : 00-20 : 00
 地 点：法政大学市ヶ谷校区布瓦索纳德大楼 25
 层 B 会议室
 主持人：约瑟夫·库拉伊那 (法政大学国际日本
 学研究所兼任所员·特任教授)

日本学作为一门以探讨文化为首要任务的学科，为

何要将身体作为研究课题之一呢？在此次学习会上，日本人类学界的代表性人物川田先生专门针对这一问题，作了详尽的论述。川田先生认为，人类正是因为具有了直立行走这一身体机能的特征，才逐渐创造出了自己的文化。而不同的文化也正是源于不同人群对自身身体机能使用过程中的微妙差异。由此而形成的各种不同文化又通过人们的身体对语言的发音、舞蹈的动作、劳动的姿态等“身体技法 (technique du corps)”的学习与掌握，为共有该文化的社会中的每一个成员打上该文化的烙印。因此，可以说，人们的身体产生了文化，而文化又塑造了人们的身体。由此可见，身体论在文化论中所占有的根本性地位。

【执笔人：安孙子 信
 (法政大学国际日本学研究所所长·文学部教授)】

학술 프론티어 서브프로젝트①
 이문화 연구로서의 「국제 일본학」의 구축
 2009 년도 알자스 심포지움 「인체와 신체
 성」에 관한 제 2 회 연구회
**「인체를 종합적으로 고찰하다—문화를
 생성하는 인간·문화에 좌우되는 인간」**

· 보고자 가와다 준조 (川田順造, 인류학자,
 가나가와 대학 (神奈川大学)
 일본상민문화연구소 객원 연구원)
 · 일 시 2009 년 7 월 24 일(금) 18 시 00 분 ~ 20 시
 00 분
 · 장 소 호세이대학 (法政大学) 이치가야
 캠퍼스 보아소나드타워 25 층 B 회의실
 · 사 회 요셉·크라이너 (호세이대학 국제일본
 학연구소 겸담 소원·특임교수)

무엇보다 문화를 논하는 학문인 일본학이 왜 신체를 문제로 삼아야만 하는가, 하는 것이 일본을 대표하는 인류학자, 가와다씨가 본 연구회에서 교시한 내용이다. 인간은 우선, 두발 보행이라는 신체기능의 특징을 전제로 하여 문화를 소유하게 되었다. 뿐만 아니라, 다른 문화들 또한 그 신체기능을 미묘하게 다른 방식으로 사용함으로 인해서 발생된 것이라 할 수 있다. 그렇게 형성된 문화는 결국 그 문화를 공유하는 사회에 속한 개개인의 신체에, 언어의 발생으로부터 댄스나 노동의 방법에 이르는 「신체기법 (technique du corps)」의 습득을 통해서 조건을 부여한다. 신체는 문화를 낳고, 문화는 신체를 낳는다. 따라서, 신체론이야말로 문화론의 근본임을 인식해야 한다는 것이 가와다씨 강연의 논점이었다.

【기사 집필 : 아비코 신 (安孫子 信,
 호세이대학 국제일본학연구소 소장·문학부 교수)】

2009 年度アルザスシンポジウム（人体と身体性）に向けての 第 3 回勉強会・「所作学研究会」合同開催

「3DCG に基づく能の所作単元の分類と型付の解釈」

- 報告者：岩月正見（法政大学 デザイン工学部教授）
- 日 時：2009 年 9 月 30 日（水）18：30～20：30
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス 市ヶ谷田町校舎 5 階 T501
- 司 会：山中玲子（野上記念法政大学能楽研究所専任所員・教授、国際日本学研究センター兼担所員）

2009 年度アルザスシンポジウム（人体と身体性）に向けての第 3 回勉強会は、9 月 30 日（水）、市ヶ谷田町校舎 T501 教室において、「所作学研究会」との合同開催で行われた。講師はデザイン工学部教授（知能ロボットデザイン研究室）の岩月正見氏、テーマは「3DCG に基づく能の所作単元の分類と型付の解釈」である。

所作学研究会は、能楽研究所とデザイン工学部システムデザイン学科を中心に、文学部・社会学部・国際文化部・キャリアデザイン学部からもメンバーが集まって 2008 年 4 月以来活動を続けている文理融合の研究会で、特に日本の伝統芸能や技芸に見られる所作にかかわる学際研究を進めてきた。その研究活動や成果が本年度のアルザスシンポジウムのテーマ「人体と身体表現」とも深く関わり、またアルザスシンポジウムの参加者の中に所作学研究会のメンバーが 3 名もいたことから、岩月氏に勉強会の講師をお願いすることになった（その後岩月氏自身にもアルザスでの発表をお願いすることになった）。

今回の講演テーマも、H21～23 年度の挑戦的萌芽研究に採択された「3DCG 所作データベースに基づく能の型付資料未記述部分の解明」（所作学研究会をベースにした共同研究）の研究成果を踏まえてのものである。

型付は、能の作品を舞台上で具体的にどう演ずるかを記した資料で、能楽の技芸伝承の核となるものである。だが、その記述はきわめて簡略化されており、能の実技に関する知識のない者には使いこなすのが難しい。特に古い時代の型付には省略が多いため、その復元に際しては専門の能役者の経験則や勘に頼らざるをえない。能をはじめとする古典芸能の所作や身体性は、きわめて文化的な色彩の強いものと思われるが、そのような領域に、あえて体系的な知見をもって切り

込んでいこうというのが、本研究プロジェクトの眼目である。

言い換えれば、「幽玄・わび・さび」などという言葉に収束するのではない、客観的な指標を用いて古典芸能の特性を明らかにしていこうということでもある。

能という芸能は、舞台上で演じられる連続した演技のどの部分をとりあげ、どこを「書かなくても判る」こととして切り捨てつつ伝承されてきたのか。また、そのような型付の記事を能らしい所作として再現するために役者が身につけている「暗黙知」はどのようなものなのか。こうした問題を、動作解析や 3DCG データベースの活用によって追究し、最終的には、CG の並列により能の演技が復元できるような演技合成ツールを作成することをめざすという岩月氏の話は、遠大ではあってもきわめて現実的な話であることが理解できた。

当日は、アルザスシンポジウムに向けての勉強会ということで、研究の前提となる能楽型付についての基礎知識や、3 次元モーションキャプチャリング、Wii リモコンの仕組み、ロボット工学の基本となる「リンク機構」「自由度」「冗長性」などの用語についても、豊富な写真や動画等を使っでの説明があり、また、関連の深い研究として、デジタルヒューマン（人間の身体機能をデジタル化し、コンピュータ上にモデル化したもの）研究プロジェクトの紹介等もあった。

運悪く種々の会議と重なる日程となってしまったせいもあり、結果出席者（計 28 名）の大部分を所作学のメンバーとその関連の教員・院生が占め、日本学関係の出席者が少なかったのが少々残念であった。

【記事執筆：山中玲子（野上記念法政大学能楽研究所
専任所員・教授、国際日本学研究センター兼担所員）】



岩月 正見 教授

Academic Frontier Sub-project 1: Developing 'International Japanese Studies' as Research on an 'Other' Culture

3rd Study Meeting in Preparation for the 2009 Alsace Symposium “Body and Embodiment”

Jointly hosted by “Syosa Study Group”

“Interpreting the Classification and Typing of Units of Syosa Dance in Noh: Based on Three Dimensional Computer Graphics”

Speaker IWATSUKI Masami (Professor, Faculty of Engineering and Design, Hosei University)
 Date Wednesday, 30 September 2009, 18:30-20:30
 Venue Hosei University Ichigaya Campus, Ichigaya Tamachi Schools 5F, T501
 Chair ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

The 3rd Study Meeting in Preparation for the 2009 Alsace Symposium, “Body and Embodiment”, was held

jointly with the Syosa Study Group on Wednesday, 30 September. A lecture was given by Professor IWATSUKI Masami of the Faculty of Engineering and Design (Intelligent Robot Design Laboratory), on the theme of “Interpreting the Classification and Typing of Units of Syosa Dance in Noh: Based on Three Dimensional Computer Graphics”.

Syosa dance movements and embodiment in traditional arts such as Noh are thought to be strongly culturally-charged, however it is his objective to delve into this realm using no less than a scientific gaze. We understood that talk of ultimately aiming to build a tool for performance synthesis in order to recreate Noh performance by computer graphics, through the use of movement data analysis and 3DCG database, is a grand but extremely realistic project.

On this occasion we were also provided with an easy-to-understand explanation of three-dimensional motion capturing, Wii remote control device, and the basic vocabulary of robot engineering, “link mechanism”, “degree of freedom”, “redundancy” - the basics behind this research.

Report by YAMANAKA Reiko (Special Adviser, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor and Staff Member, The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute)

学术开拓推进项目①
 构筑以异文化研究为视点的国际日本学
 面向 2009 年度阿尔萨斯・“人体与身体性”
 研讨会的第 3 次学习会
 与“行为学研究会”联合举办
**“基于 3DCG 对能乐进行行为单元的分类和
 演出方式的解释”**

报告人：岩月 正见（法政大学设计工学部教授）
 时 间：2009 年 09 月 30 日（周三）18：30-20：30
 地 点：法政大学市ヶ谷校区市ヶ谷田町校舍 5
 层 T501 房间
 主持人：安孙子 信（法政大学国际日本学研究所
 所长・文学部教授）

面向 2009 年度阿尔萨斯“人体与身体性”研讨会的第 3 次学习会于 09 月 30 日（周三）召开。此次学习会由本所与“行为学研究所”共同举办，设计工学部的

岩月正见教授（智能机器人设计研究室）在会上作了题为“基于 3DCG 对能乐进行行为单元的分类和演出方式的解释”的演讲。

以能乐为首的古典戏剧中的行为以及身体性，往往包含着极为浓厚的文化色彩。而岩月正见教授所从事的研究，正是着眼于运用理工科的知识理论来深入剖析能乐等古典戏剧中的行为以及身体性。岩月正见教授试图通过充分运用动作解析以及 3DCG 数据库等方法，最终制作出一套能够依照 CG 的并列来复原能乐表演技巧的演技合成工具。而岩月正见教授的这一构想虽然是其在理工学科领域的宏图大志，但对于研究“人体与身体性”同样具有重要的现实意义。

在当天的演讲中，作为开展研究的前提条件，岩月正见教授还对三维动作捕捉链接、Wii 遥控设备的构成、“链接组织”、“自由度”、“冗长性”等机器人学的基本概念进行了深入浅出、通俗易懂的讲解。

【执笔人：山中 玲子（野上纪念法政大学能乐研究所
 专任所员・教授、国际日本学研究所兼任所员）】

학술 프론티어 서브프로젝트①
이문화 연구로서의 「국제 일본학」의 구축
2009년도 알자스 심포지움 「인체와 신체성」에 관한 제3회 연구회

「쇼사학(所作学) 연구회」공동 개최 (쇼사: 노(能), 가부키(歌舞伎) 등의 동작, 역사주)

「3D CG를 이용한 노(能) 동작의 단위 분류와 안무에 관한 기록의 해석」

- 보고자 이와츠키 마사미 (岩月 正見, 호세이대학 (法政大学) 디자인공학부 교수)
- 일 시 2009년 9월 30일(수) 18시 30분 ~ 20시 30분
- 장 소 호세이대학 (法政大学) 이치가야 캠퍼스 이치가야 다마치 교사 5층 T501
- 사 회 아비코 신 (安孫子 信, 호세이대학 국제일본학연구소 소장·문학부 교수)

알자스 심포지움 「인체와 신체성」에 관한 제3회 연구회가 「쇼사학 연구회」와 공동 개최로 9월 30

일(수) 개최되었다. 강사는 디자인공학부 교수 (지능로봇디자인 연구실)의 이와츠키 마사미씨로, 테마는 「3D CG를 이용한 노 동작의 단위 분류와 안무에 관한 기록의 해석」이었다.

노를 비롯한 고전예능의 동작이나 신체성은 지극히 문화적인 색채가 강한 것으로 여겨지지만, 그러한 영역에 과감히 이공계 지식을 도입하고자 하는 것이 이와츠키씨 연구의 착안점이다. 이와츠키씨는 동작 해석이나 3D CG 데이터베이스의 활용을 통해 최종적으로는 CG를 병렬로 배치하여 노의 연기를 복원할 수 있도록 연기 합성 툴의 개발을 목표로 하고 있다고 한다. 원대한 계획이긴 하나 지극히 현실성있는 주장이라는 생각이 들었다.

강연 중, 연구의 전제가 되는 3차원 모션 캡처링과 Wii 리모콘의 구조에 대한 설명과 더불어 「링크 기구(機構)」 「자유도」 「여유성」 등, 로봇 공학의 기본 용어에 대한 알기 쉬운 설명도 있었다.

【기사 집필: 야마나카 레이코 (山中玲子, 노가미기념 호세이대학 노가쿠연구소 (野上記念法政大学能楽研究所) 전임 소원·교수, 국제일본학연구소 겸담 소원)】

法政大学国際日本学研究所
学術フロンティア・サブプロジェクト①異文化研究としての「日本学」の構築
アルザスシンポジウム(身体と身体性)に向けての第3回勉強会
「所作学研究会」合同開催

**3DCGに基づく
能の所作単元の分類と型付の解釈**

・講師: 岩月正見(法政大学デザイン工学部教授)
・日時: 2009年9月30日(水)18:30~20:30
・場所: 法政大学 市ヶ谷谷田町校舎5階 T501

【発表概要】
能の技法伝承の本質部分を担う型付資料の記述は、極めて簡略化されており、熟達した演者以外は、研究資料として使いこなすのは難しい。特に所作と所作の間をどうつなぐのかという型付に記述されない部分に関しては、専門の能役者の経験則や勘に頼らざるをえず、客観的に記述することはできなかった。本発表では、初学者でも、型付資料から舞の一連の動きを3DCGとして再現できるシステムを構築するため、3DCG技術の観点から能の所作を分類し、型付を解釈する新しい方法論について解説する。

・参加申込: 下記E-mailアドレスにて申込受付を致します。
※標題に「9月30日アルザスシンポジウム第3回勉強会参加希望」とご記入の上、氏名、所属、住所、電話番号を本文にご明記ください。参加可否の連絡は、お送り頂きましたE-mailアドレス宛にご返信致します。(お送り頂きました個人情報は、本目的以外には使用いたしません。)

連絡先: 法政大学国際日本学研究センター事務局
E-mail: nihon@hosei.ac.jp
〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-3 九段校舎別館1階
TEL 03-3264-9882・FAX 03-3264-9884
http://aterui.hosei.ac.jp/



ポスター



会場の様子



会場の様子

2009 年度アルザスシンポジウム（人体と身体性）に向けての 第 4 回勉強会

「奇形の背後にあるもの

— 伝統的なまた現代の視覚メディアにおける妖怪図 —

- 報告者：ジリア・パップ（法政大学グローバル教養学部助教）
- 日 時：2009 年 10 月 9 日（金）18：30～20：30
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所長・文学部教授）

2009 年 10 月 9 日（金）、18 時 30 分から 20 時 30 分過ぎまで、法政大学国際日本学研究所セミナー室において、「2009 年度アルザス・シンポジウム（人体と身体性）に向けての第 4 回勉強会」が開かれた。勉強会最終回の今回は新進気鋭の国際日本学者でメディア論のジリア・パップ氏から、「奇形の背後にあるもの—伝統的なまた現代の視覚メディアにおける妖怪図」というテーマで含蓄に富んだレクチャーをしていただいた。

平安・鎌倉・室町の「百鬼夜行」や物の怪図に始まり、江戸・明治の浮世絵・錦絵を経て、現代の「ゲゲゲの鬼太郎」にまで至る大変大きな流れを、視覚的な情報量も豊富にたどる講演は、それだけでも聞きごたえ、見ごたえ十分なものであったが、一貫して確認されていったのは、妖怪といった形での、身体の奇形表現は、背後に「変化への恐怖」を隠し、かつそれを表しているということであった。その際、恐れられる

‘変化’はそれ自身、老いや病といった身体の‘変化’でもありうるが、それはまた、自然の、歴史の、社会の‘変化’でもありえた。こうして、奇形は、そこに、自然現象・社会現象を問わず、万象の差異変化を吸収し吐き出しているのである。和⇔荒、御霊⇔怨霊、神⇔人、男⇔女、里⇔山、冬⇔夏、乾⇔湿、現世⇔他界、内⇔外、人⇔物といったあらゆるカテゴリーに関わる差異変化の間（あわい）に、奇形は立ち表われている。そして、それは逆にいえば、人体というのが、不安の感情を介して万象とある特権的な関係にあるということも示すのである。

人体という存在の特殊性をまた別様に痛感させられた勉強会であった。

【記事執筆：安孫子 信
（法政大学国際日本学研究所所長・文学部教授）】

Academic Frontier Sub-project 1: Developing
‘International Japanese Studies’ as Research on
an ‘Other’ Culture

4th Study Meeting in Preparation for the
2009 Alsace Symposium “Body and Em-
bodiment”

“In the Background of Deformity:
Traditional Monster Art that is also
found in Contemporary Visual Me-
dia”

Speaker Zilia PAPP (Assistant Professor, Depart-
ment of Global and Interdisciplinary
Studies, Hosei University)
Date Friday, 9 October 2009, 18:30-20:30
Venue Hosei University Ichigaya Campus '58
Building 2F, Research Center for Interna-
tional Japanese Studies seminar room
Chair ABIKO Shin (Director, Hosei University
Research Center for International Japa-
nese Studies; Professor, Faculty of Let-
ters)

to trace the path of the great trend which found its begin-
nings in ‘Hyakki yako’ (Night Parade of One Hundred De-
mons) and the ‘Mononoke’ monster illustrations of the
Heian, Kamakura and Muromachi periods, continued
through Ukiyo-e and Nishiki-e pictures of Edo and Meiji,
and can still be seen in ‘Gegege no Kitaro’ of the present
day. Consistent throughout the ages, it was indicated, is
how expression of physical deformity, in the form of mon-
sters, confines any ‘fear towards changes’ to the back-
ground, and moreover goes about portraying itself in just
this way. Within this process, feared ‘changes’ can refer to
physical change in a being, but also to ‘changes’ in the
natural world, history, or society. Thus, deformity absorbs
and exudes universal variant changes irrespective of their
coming from natural or social phenomena. Deformity re-
veals itself in variant changes relating to all categories.
Put another way, it is through such feelings of instability
that the human body is shown to have connection with
universal privileges. This was a study meeting to make us
keenly realize in yet another way the characteristics of the
existing human body.

Report by ABIKO Shin (Director, Hosei University Re-
search Center for International Japanese Studies;
Professor, Faculty of Letters)

This lecture made use of abundant visual information

学术开拓推进项目①
 构筑以异文化研究为视点的国际日本学
 面向 2009 年度阿尔萨斯·“人体与身体性”
 研讨会的第 4 次学习会

“诡异形态的背后 — 传统以及现代视觉媒体中的妖怪图”

报告人：基里亚·帕普（法政大学 全球化教养学部助教）

时 间：2009 年 10 月 9 日（周五）18：30-20：30

地 点：法政大学市ヶ谷校区 58 年馆 2 层国际日本学研究所研究室

主持人：安孙子 信（法政大学国际日本学研究所所长・文学部教授）

基里亚·帕普先生在演讲中回顾了平安・镰仓・室

학술 프론티어 서브프로젝트①
 이문화 연구로서의 「국제 일본학」의 구축
 2009 년도 알자스 심포지움 「인체와 신체성」에 관한 제 4 회 연구회

「기형 (奇形) 의 이면에 존재하는 것 — 전통적인 것과 현대적 시각 미디어에 묘사되어 있는 요괴 그림」

- 보고자 파프 질리아 (호세이대학 (法政大学), 글로벌 교양학부 조교)
- 일 시 2009년 10월 9일 (금) 18:30~20:30
- 장 소 호세이대학 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실
- 사 회 아비코 신 (安孫子 信, 호세이대학 국제일본학연구소 소장·문학부 교수)

이번 강연에서는 헤이안 (平安) 시대·가마쿠라 (鎌倉) 시대·무로마치 (室町) 시대에 그려진 「백귀야행」(「百鬼夜行」)이나 요괴 그림에서부터 시작하

町时代的“百鬼夜行”图以及其它妖怪图、江戸·明治时代的浮世绘·锦绘、现代的“鬼太郎”等有关妖怪的形象，并在历史的长河中，撷取丰富的信息，向与会者昭示出所谓的“妖怪”形态，其身体的奇形怪状背后，隐藏的实际上是“对于变化的恐惧”。而这种令人感到恐惧的“变化”既有可能是自身的、身体上的“变化”，也有可能是自然的、历史的、社会的“变化”。无论是自然现象还是社会现象，妖怪的奇形怪状都在呼吸吐纳着世间气象万千的差异变化。或者说，所有种类的差异变化都可以在妖怪的奇形怪状中得到体现。换言之，人体实际上通过不安的情绪，保持着对于世间万象的一种特权性关系。因此，此次研究会再次让与会者充分地感受到了人体的特殊性。

【执笔者：安孙子 信
 (法政大学国际日本学研究所所长・文学部教授)】

여 에도 (江戸) 시대·메이지 (明治) 시대의 우키요에 (浮世絵)·니시키에 (錦絵) 를 거쳐 현대의 「게게게의 귀타로」(「ゲゲゲの鬼太郎」) 에 이르기까지의 큰 흐름을 풍부한 시각적 정보를 통해 파악할 수 있었다. 또한, 이번 강연에서는 요괴라는 형상화를 통한 기이한 신체 표현의 이면에는 ‘변화에 대한 공포’ 를 은폐하는 동시에 드러내는 이중적 기능이 내재되어 있다는 것을 확인했다. 이때, 두려움을 유발하는 ‘변화’란 기본적으로 신체의 ‘변화’ 를 의미하지만, 그 외에도 자연이나 역사, 사회의 ‘변화’ 를 의미하기도 한다. 이렇게 해서, 기형은 자연현상, 사회현상을 막론하고, 온갖 사물과 형상의 차이 변화를 흡수하여 표출한 것이다. 즉, 기형은 모든 카테고리와 관련된 차이 변화의 틈새에서 생겨난 것이라 할 수 있다. 그리고 이는 반대로 말하자면, 인체는 불안이라는 감정적 요소를 매개로 모든 사물이나 형상과 특권적인 관계에 있다는 사실을 입증하는 것이다. 인체라는 존재의 특수성을 색다른 양식을 통해 깨닫게 된 연구회였다.

【기사 집필：아비코 신 (安孫子 信, 호세이대학 국제일본학연구소 소장·문학부 교수)】



シリア・パップ 氏



会場の様子

2009 年度第 4 回東アジア文化研究会

「中国は日米を追い越すか？」

— 科学技術力視点から見る中国発展の可能性 —

周 程 (早稲田大学孔子学院副院長、
留学センター客員准教授)

- 日 時：2009 年 7 月 7 日 (火) 18 時 30 分～20 時 30 分
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス ポアソナード・タワー 8 階 0806 教室
- 司 会：王 敏 (法政大学国際日本学研究所教授)

現在、世界経済は前例のない金融危機に見舞われているが、中国経済は 2009 年に 8%の経済成長率を確保する見込みである。こうしたことから「21 世紀は中国の世紀」という報道が多く見られるが、この見解には問題がある。

確かに、中国は改革・開放政策によって政治中心の路線から経済建設を中心とする路線に転換し、以来年平均 9.8%の高成長を遂げてきた。2008 年までの 30 年間で実質 GDP は約 16.4 倍、外貨準備高も 1.7 億ドルから 2008 年末には世界一の 1.95 兆ドルへと急増した。現在、中国はアメリカと日本に次ぐ世界第三位の GDP 大国であり、輸出入合計でも世界第三位の貿易大国である。特に、製造業における輸出額を見ると、中国はアメリカと日本を超えて EU と同レベルの高い割合を占めている。ゴールドマン・サックスが発表した世界経済の将来推計によれば、中国の GDP は 2015 年には日本を超え、2040 年にはアメリカを超えるとも言われている。

GDP の伸び率に基づく予測では中国経済の将来は楽観的に語られているが、しかし、中国の実際の現状は未だ立ち遅れていると言わざるを得ない。例えば、日中主要経済発展指標を比較すると、2005 年の中国の男女平均寿命は 72.95 歳だが、これは日本の 1971 年の 72.9 歳と同レベルである。その他の指標を比較しても、中国の現状は日本よりも約 30 年程度立ち遅れていると考えるべきだろう。

中国社会が抱える問題のうち、最大の問題は人口問題である。2030 年にはピークの 14 億人が推計されているが、労働人口の増加は 2010 年を境に減少し、それ以降は急速な高齢化が予測されている。また、国内の経済格差も深刻な問題である。2007 年の一人当

たり GDP は平均 3000 ドルであったが、各省の統計では上海市の 8000 ドルに対し貴州省は 1000 ドルで約 8 倍の格差があり、国内格差は深刻である。さらに、世界トップ 500 にランクインした中国企業のリストを見ると、資源やエネルギーに関する大規模な国有企業が大半を占めているが、各省別 GDP 平均成長率は国有企業数の割合と反比例している。

こうした中国国内の現状を検討すると、中国は日米を追い越す次世代の大国になれるかという問題に対しては、少なくとも建国 100 周年を迎える 21 世紀半ばまでは非常に困難であると言わざるべきだろう。その要因のひとつは、中国の科学技術力がまだ低いことにある。

現在、中国経済はさまざまな困難に直面している。労働コストは上昇しており、資源、原材料、水資源の不足は深刻である。中でも、エネルギー使用の低効率は環境問題をより深刻なものとしている。現在、中国のエネルギーは石炭と石油に依存しているが、今後シフトすべき天然ガスや水力発電の分野でも産出量は大幅に不足しており、風力発電や太陽光発電などの新たな技術開発が緊急課題となっている。これまでのような低い人件費と低効率の資源使用による経済発展は危機的状況にあり、科学技術力の向上が不可欠である。

しかし、2006 年の主要国における対 GDP 研究開発費を比較すると、日本は 3.61%と世界最高レベルであるが、中国は 1.43%に過ぎない。また、中国の研究者数は近年増加しているが、2006 年の人口 1 万人当たりの研究者数は日本が世界最多の 64.2 人であるのに対し、中国は 9.3 人である。世界主要国の論文数占有率と被引用回数占有率の推移では、近年の論文数は増えているものの、被引用回数は低いレベルにと



周 程 氏



会場の様子

どまっている。発明特許出願件数も少ない。中国企業の99%は特許を申請しておらず、四分之三の企業には研究開発部門がなく、三分の二は研究開発活動を行わず、60%は自主ブランドがないという状況である。「世界の工場」と言われる中国だが、その生産活動を支える技術は主にアメリカと日本を中心とする外国からの導入に依存している。人的資源を開発して創造力に富んだ経済発展を実現するためには、「自主イノベーション」が必要である。2006年、国務院は「国家中長期科学と技術発展計画綱領」を提出し、2020年には研究開発費が対GDP2.5%以上、科学技術の経済への貢献度60%以上、海外への技術依存度30%以下、特許件数と論文被引用回数を世界第5位以内という目標を打ち出した。だが、これらは非常に困難な課題である。

「世界の工場」、「世界の市場」と言われる中国経済だが、国内には様ざまな問題が山積している。「Made in China」の時代から、「自然科学と工学に基づく技術イノベーション」を転機とした「Innovated in China」の時代を経て、「人文と社会科学に基づく体制改革」を契機とした「Innovated by China」の時代を迎えることが、今後の中国にとって必要なステップである。1820年当時、世界経済の三分の一のGDPを占めていた中国経済がいつ回復するのか、「眠れる中国」がいつ目を覚ますかという問題に対しては、社会の安定を確保するための政治改革が必要であろう。

【記事執筆：及川 淳子

(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】

East Asian Culture Research Meeting: report
Academic Frontier Sub-project 2: Japan as
an 'Other' Culture

4th East Asian Culture Research
Meeting of 2009

“Will China overtake Japan and
America? The Possibilities for Chi-
nese Development from the Aspect
of Scientific Technological Ability”

Speaker ZHOU Cheng (Deputy Director, Waseda
University Confucius Institute; Visiting
Associate Professor, Center for Interna-
tional Education)

Date Tuesday, 7 July 2009, 18:30-20:30

Venue Hosei University Ichigaya Campus, Bois-
sonade Tower 8F, Classroom 0806

Chair WANG Min (Professor, Hosei University
Research Center for International Japa-
nese Studies)

It is said that the 21st Century will be China's cen-

tery, but there are problems with this view. Chinese economic future is often optimistically discussed based on the GDP growth rate, but we should take into consideration that the present state of Chinese society is about 30 years behind that of Japan.

It is safe to say that it will be extremely difficult for China to overtake Japan and America by the middle of the 21st Century, which will mark 100 years since the founding of the nation. One reason being, that the level of Chinese scientific technological ability is still low.

China may be called “the world's factory” or “the world's marketplace”, but serious problems are mounting at home. A necessary step for the future China to take will be to progress from the age of “Made in China”, pass through an age of “Innovated in China” with “technological innovation based on natural science and engineering” and see in the age of “Innovated by China” brought about by an “organizational revolution based on human and social science”.

In response to the issue over when the dormant China will awaken, we will need more than anything else political change in order to secure social stability.

Report by OIKAWA Junko (Guest Scholar, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

东亚文化研究会报告
学术开拓推进项目②作为异文化的日本
2009年第4次东亚文化研究会

“中国能超日赶美吗？——从科技能力的视角考察中国发展的可能性”

报告人：周程（早稻田大学孔子学院副院长、留学中心客员副教授）

时间：2009年07月07日（周二）18:30-20:30

地点：法政大学市ヶ谷校区布瓦索纳德大楼8层0806教室

主持人：王敏（法政大学国际日本学研究所教授）

很多人都认为，“21世纪是中国的世纪”，但是这种看法实际上是有问题的。人们往往只看到GDP的增长率，从而对中国经济的未来充满盲目的乐观。然而实际

동아시아문화연구회 보고
학술 프론티어·서브프로젝트② 이문화로서의 일본

2009년도 제4회 동아시아문화연구회

「중국은 일본과 미국을 추월할 수 있을까？」

—과학기술력의 시점에서 본 중국 발전의 가능성—

- 보고자 슈데이 (周程, 와세다대학 (早稻田大学) 공자학원 (孔子学院) 부원장, 유학센터 객원 준교수)
- 일시 2009년 7월 7일 (화) 18시 30분 ~ 20시 30분
- 장소 호세이대학 (法政大学) 이치가야 캠퍼스 보아소나드타워 8층 0806 교실
- 사회 왕민 (王敏, 호세이대학 국제일본학연구소 교수)

「21세기는 중국의 세기」라 불리고 있는데, 이러

上,应该清醒地认识到,中国社会的实际现状较之日本至少还有30年左右的差距。

可以说,中国在建国100周年,即21世纪中叶之前,很难做到“超日赶美”。其中一个重要的原因就在于,中国的科技能力还处于一个很低的水平上。

目前,中国已经被人们称作“世界工厂”、“世界市场”。但是,中国国内还存在着数不胜数的各种严重问题。因此,对于今后的中国来说,必须要经历先通过“基于自然科学和工学的技术创新”将“Made in China”转变为“Innovated in China”,然后再通过“基于人文和社会科学的体制改革”将“Innovated in China”转变为“Innovated by China”这样一个不可跨越的历史阶段。

同时,当面对着“沉睡中的中国何时觉醒”这一世纪之问时,中国的首要任务还是应以必要的政治改革来确保社会的安定。

【执笔人：及川淳子

(法政大学国际日本学研究所客员学术研究员)】

한 견해에는 문제가 있다. 중국 경제의 장래는 GDP 성장률에 기초하여 낙관적으로 일컬어지는 경우가 많으나, 중국 사회의 현황은 일본보다도 약 30년 정도 뒤쳐져 있다고 봐야 할 것이다.

중국이 일본이나 미국을 추월할 수 있을까 하는 문제는 건국 100주년을 맞이하는 21세기 중반까지는 매우 어려울 것으로 보는 것이 타당할 것이다. 그 한 요인으로 중국의 과학기술력이 아직은 낮은 수준에 머물러 있다는 점을 들 수 있다.

「세계의 공장」, 「세계의 시장」으로 불리는 중국이지만 국내에는 심각한 문제가 산적해 있다. 「Made in China」시대부터 「자연과학과 공학에 기초한 기술혁신」을 전환점으로 한 「Innovated in China」시대를 거쳐 「인문과 사회과학에 기초한 체제 개혁」을 계기로 한 「Innovated by China」시대를 맞이하는 것이 앞으로 중국이 나아가야 할 단계이다.

「잠자는 중국」이 언제 잠에서 깨어날까 하는 문제에 관해서는, 무엇보다도 사회의 안정을 확보하기 위한 정치 개혁이 필요하다고 전망된다.

【기사 집필：오이카와 준코 (及川淳子,

호세이대학 국제일본학연구소 객원 학술연구원)】

2009 年度第 5 回東アジア文化研究会

「文化の特質と異文化コミュニケーションの必要性

— 共生・共存・共栄の国際社会 —

王 秀文 (大連民族学院学術委員会副委員長、
国際言語文化研究センター長)

- 日 時：2009 年 8 月 4 日 (火) 18 時 30 ～ 20 時 30 分
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス ポアソナード・タワー 8 階 0806 教室
- 司 会：王 敏 (法政大学国際日本学研究所教授)

国際社会のグローバル化にともない、異文化コミュニケーションの必要性が盛んに取り上げられている。ここでは、文化とは何か、なぜ異なるのかという視点から、風土・歴史・民族などの特徴を通して日本と中国の文化の基本的な相違を指摘し、日中間の異文化コミュニケーションの研究と教育における方向性や実践的な方法を検討する。

「文化」の定義については「人間には、経験と模倣および言語を通して、集団の一員としての思考、感情、行動を仲間から学習し、獲得したものを同世代、後世代の人々に伝達する性質があり、集団の一員として学習、伝達されるものが、一つのセットとして統合性をもつ総体」として考える。日本と中国の上位文化について比較すると、日本は「国家＝民族＝宗教＝言語」であるが、中国は「国家≠民族≠宗教≠言語」である。中国は 13.6 億の人口を有し、56 の民族から成る多民族国家であり、日本は人口 1.28 億人の単一民族国家である。「中国文化」を研究する際には、「中国」の定義が政治の概念になっていないかという点に注意すべきであり、「中国」とは何かという問いかけと「民族」への理解が不可欠である。

次に、「風土」の重要性について指摘したい。風土とは「人間の精神・生活様式として具現されている自然環境であり、人間を含む全一體的な世界として総合された概念」として考えられる。風土はその特質によって生産・生活様式の異なる民族の性格・世界観・価値観を含んだ民族文化を決定し、社会的な行動にも大きく関わる要素である。中国の文化風土を概観すると、「遊牧・田畑・乾燥多風」を特徴とする「黄河文明」と、「農耕・稲作・湿潤多雨」を特徴とする「長江文明」に二分される。また「ナラ林文化圏」と「照

葉樹林文化圏」の区分によって日本と中国を見ると、中国北部の紅山文化と日本の縄文文化における類似性が指摘され、風土と文化の関係の重要性を理解することができる。

歴史の面では、中国の 5000 年の歴史が「易姓革命」による「支配と融合」を繰り返してきたことと、近代では外国による侵略があったことに注目したい。特に「易姓革命」は新しい王朝が前王朝を制圧することによって支配を正当化させたため、王朝が変わることによる文化面での破壊的な影響力は多大であった。一方、日本は 2000 年の歴史において一貫性があり、海外の文化を旺盛に吸収するという特徴があった。以上のように、民族、風土、歴史についても全て「文化」として理解すべきである。

今日の国際社会では、「共生・共存・共栄」がキーワードになっており、具体的には、①グローバル化、②多元化、③流動化、④活性化、という特徴が挙げられる。国際社会は多元化しているが、一方で政治的なイデオロギーによって世界を区分する傾向が依然として存在しているのも事実である。グローバル化、多元化、流動化と同時に、イデオロギーを乗り越えて新たな制度化、体系化を活性化させる必要があるといえよう。

中国は建国以後 1978 年までは政治中心の一元化した社会であったが、1978 年からの 30 年間は開放改革政策を推進し、1992 年からは市場経済に転換した。現代中国を考察する場合には、建国以後の 60 年を 30 年ずつ 2 つの時期に区分して考察するのが良いだろう。国是である経済発展のためには、友好的な国際環境と安定した国内環境を確保することが何よりも優先される。「中国は何主義か？」というイデオロ



王 秀文 氏



会場の様子

ギーの議論よりも、主義には関係なく相互に協力できるところで協力すべきであろう。

例えば、2008年の調査によると、中国に進出した日本企業1.7万社のうち、大連への進出は3.6千社である。また、2007年の統計では大連への日本人の出入りは1日800人、年間24万人に上り、人的交流はますます盛んになっている。中国では大学生の就職難が深刻だが、大連では大学の日本語学科卒業生の就職率は100%であり、日本語教育が盛んになっている。

異文化コミュニケーションとは、つまり「文化を跨ぐ」ということであり、最も必要とされるのは「言語（言語知識+言語能力）」と「文化（文化知識+文化能力）」であり、「知識」を「能力」に切り替える必要がある。例えば、価値観・思考様式などの内面的な精神活動、言語活動や身体表現様式、さらに衣食住などの

生活様式について理解するだけでなく、それらを身につける「能力」が必要だろう。

異文化コミュニケーションを行う場合には、次の点に留意する必要がある。①文化には優劣・高低はなく、平等である、②尊重・友愛の立場で感情に配慮すべき、③同じところよりも違うところを見出すのが大事、④互いにコミュニケーションの場とルートを創ることに努力する、⑤自己の立場より相手の立場に立つてものを考えるべき、⑥互いに理解を深め、対立を避ける必要がある。

これらの視点により異文化理解とコミュニケーションを行うことで、「共生・共存・共栄の」国際環境が創出されると考える。

【記事執筆：及川 淳子

(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】

East Asian Culture Research Meeting: report Academic Frontier Sub-project 2: Japan as an 'Other' Culture

5th East Asian Culture Research Meeting of 2009

“The Necessity for Cultural Characteristics and Communication of Other Culture: an International Society of Symbiosis, Coexistence and Co-prosperity”

Speaker WANG Xiuwen (Deputy Chief of Academic Board, Dalian Nationalities University; Director, International Language and Culture Research Center)

Date Tuesday, 4 August 2009, 18:30-20:30

Venue Hosei University Ichigaya Campus, Boissonade Tower 8F, Classroom 0806

Chair WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

Globalization of international society emphasizes the

need for the communication of 'other' culture. Opportunity was taken on this occasion to indicate the differences between Japanese and Chinese culture from the point of natural features, history and race, and to investigate directions and practical methods within research and education in cross-cultural communication between Japan and China.

Important in the communication of other culture are “language (language knowledge + language ability)” and “culture (cultural knowledge + cultural ability)”, with a necessity to transform “knowledge” to “ability”.

Also, we should take heed of the following points when carrying out communication. 1) Cultures are equal, neither superior and inferior, nor high and low. 2) Consider people's feelings in positions of respect and friendship. 3) Pick out differences rather than similarities. 4) Strive to create places and routes for communication. 5) Think from another's point of view rather than ones own. 6) Deepen mutual understanding, and avoid antagonism.

By achieving communication and cross-cultural understanding along these lines, we will create an international environment of “symbiosis, coexistence and co-prosperity”.

Report by OIKAWA Junko (Guest Scholar, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

东亚文化研究会报告
学术开拓推进项目②作为异文化的日本
2009年第5次东亚文化研究会

“文化的特质与异文化交流的必要性
——共生·共存·共荣的国际社会”

报告人：王 秀文（大连民族学院学术委员会副委员长、国际语言文化研究中心负责人）

时 间：2009年08月04日（周二）18：30-20：30

地 点：法政大学市ヶ谷校区布瓦索纳德大楼8层 0806 教室

主持人：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）

伴随着国际社会的全球化进程，异文化交流的必要性越来越引起人们的重视。在此次研究会上，王秀文先生从风土·历史·民族的视角分析指出了日本与中国在

文化方面的差异，并对日中两国间异文化交流研究和教育的方向性和实践方法进行了探讨。

王秀文先生认为，对于异文化交流而言，最为重要的是“语言（语言知识+语言能力）”和“文化（文化知识+文化能力）”，而在这其中将“知识”转化为“能力”是极为重要的。

此外，王秀文先生还指出，在进行异文化交流时，尤其应注意以下几点：①一切文化均是平等的，没有优劣·高低之分；②应以尊重·友爱的态度来考虑对方的感受；③既要看到共同点，更要寻找不同点；④致力于创造交流的平台和途径；⑤既要站在自己的立场上，更要站到对方的立场上去考虑问题；⑥加深相互理解，避免相互对立。

王秀文先生认为，如果能够遵循上述视角来进行异文化理解 and 交流，那么就一定能够创造出一个“共生·共存·共荣”的国际环境。

【执笔人：及川 淳子

（法政大学国际日本学研究所客员学术研究员）】

동아시아문화연구회 보고
학술 프론티어·서브프로젝트② 이문화로
서의 일본

2009년도 제5회 동아시아문화연구회

「문화의 특질과 이문화 커뮤니케이션
의 필요성－공생·공존·공영하는 국
제사회」

- 보고자 오슈분 (王 秀文, 대련민족학원 학술위원회 부위원장, 국제언어문화 연구센터장)
- 일 시 2009년 8월 4일 (화) 18시 30분 ~ 20시 30분
- 장 소 호세이대학 (法政大学) 이치가야 캠퍼스 보아소나드타워 8층 0806 교실
- 사 회 왕 민 (王 敏, 호세이대학 국제일본학연구소 교수)

국제사회가 글로벌화됨에 따라서 이문화 커뮤니케

이션의 필요성이 강조되고 있다. 이번 연구회에서는 풍토·역사·민족의 시점에서 일본과 중국 문화의 차이를 지적하고, 중·일간의 이문화 커뮤니케이션 연구와 교육을 위한 방향성과 실천적인 방법을 검토했다.

이문화 커뮤니케이션에 있어서 중요한 것은 「언어 (언어지식+언어능력)」와 「문화 (문화지식+문화능력)」이며, 「지식」을 「능력」으로 전환할 필요가 있다.

또한, 커뮤니케이션을 할 때에는 다음과 같은 점에 유의해야 한다. ①문화에는 우열이나 높고 낮음이 없고, 평등하다. ②존중·우애의 입장에서 감정을 배려해야 한다. ③공통점보다는 차이점을 찾아낸다. ④커뮤니케이션의 장과 통로를 마련하도록 노력해야 한다. ⑤자신의 처지보다 상대의 처지에서 생각한다. ⑥상호 이해를 돈독히 하고 대답을 피한다.

이와 같은 시점에 바탕을 둔 이문화 이해와 커뮤니케이션이 수반될 때, 「공생·공존·공영」하는 국제 환경은 조성될 것이다.

【기사 집필：오이카와 준코 (及川 淳子,

호세이대학 국제일본학연구소 객원 학술연구원)】

2009 年度第 6 回東アジア文化研究会

日中交流の新世代・「80 後」

— 『ほんとうは日本に憧れる中国人』の検証 —

謝 宗睿

(法政大学国際日本学研究所外国人客員研究員、
中国国務院発展研究センター ヨーロッパ・
アジア社会発展研究所助理研究員)

- 日 時：2009 年 8 月 20 日 (木) 18 時 00 分～20 時 00 分
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス 80 年館 7 階大会議室 1 (角)
- 司 会：王 敏 (法政大学国際日本学研究所教授)

中国において、異文化としての日本はどのように認識されているだろうか。今後の日本と中国の交流を担う新世代の「80 後」とは、どのような世代なのだろうか。本報告は、王敏著『ほんとうは日本に憧れる中国人——“反日感情”の深層分析』(PHP 新書、2005 年)を検証しつつ、報告者自身の記憶と体験を中心に中国の「80 後」について考察するものである。

前掲書は、日中関係が「国交正常化以来最悪」といわれた 2005 年に出版された。中国人の日本観に潜む愛憎二重性の形成要因を探り、真の日中友好のあり方を提起した同書は「敏感な時期」に出版された「敏感な本」であったといえよう。ここでは「中国社会では日本の“モノ”や“生活”に憧れて“日本ブーム”が起きている」という著者の指摘を、「80 後」の視点から検証したい。

「80 後」とはどのような世代なのだろうか。文字通り 1980 年代に生まれた世代を指し、『中国人口統計年鑑』によれば 2 億人を上回る人口が存在している。具体例として、1982 年に中国内陸部の都市である湖北省武漢市に生まれた報告者自身の生い立ちと日本観を紹介したい。日本語を始めたのは 1994 年の中学入学時で、2003 年には外務省の「日中韓ヤングリーダーズ交流プログラム」に参加し初めて日本を訪問した。2004 年大学卒業後は現在所属する研究所に勤務し、2008 年 10 月から 2009 年 8 月まで法政大学国際日本学研究所で長期の研究留学をしている。

1982 年を基点に中国の現代史を見ると、日中国交正常化は 10 年前、文化大革命の終焉は 6 年前、改革・開放政策の実施はわずか 4 年前のことだ。「一

人っ子政策」によって、一人の子ども、二人の親、四人の祖父母という「四二一型家庭構造」となり、「小皇帝」、「小王女」、「温室の花」と呼ばれた子ども時代を過ごした。批判されることも多いが、一人っ子同士の結婚や両親と祖父母の老後の問題など経済的、精神的負担が大きい世代でもある。

子ども時代にもっとも強い印象を残した世界的な出来事は 1991 年のソ連崩壊と冷戦の終結で、イデオロギーにとらわれない「80 後」世代としての原点だと考える。中学、高校時代には「試験のマシン」、大学入学後は「崩れていく世代」、社会人になってからは「月光族」、「啃老族」などの流行語が「80 後」を象徴している。しかし、現在では成熟に向かっていく世代でもあり、スポーツや政治の分野で活躍する代表的な「80 後」も注目されている。また、四川大地震や北京五輪でのボランティアなどは「80 後」の成熟を象徴しており、「鳥の巣」世代とも呼ばれている。

「80 後」の日本観は「二重構造」である。例えば、子ども時代の思い出のひとつは「一休さん」、「聖闘士星矢」など日本のテレビアニメだ。同級生たちと日本の漫画を貸し借りし、日本製のテレビゲームで遊び日本への憧れが強くなった。漫画、アニメ、ゲーム、ドラマなどの日本のコンテンツに熱中し、村上春樹を愛読するのが「80 後」世代である。日本語を専門としない友人にも「Made in Japan」は浸透しており、「80 後」には日本への強い憧れがある。

一方、「80 後」の祖父母世代は戦争経験者で、戦争の記憶が「家族の物語」として語り継がれているのも



謝 宗睿 氏



会場の様子

事実である。報告者は小学校入学まで祖母と過ごし、1938年の日本軍による武漢作戦について祖母が語る物語として耳にした。それは「反日教育」ではなく、自分と自分の家族の物語を孫に語って聞かせたいという祖母の意思だと考えている。また、父母の世代、例えば母が18歳のときに日中の国交が正常化され、毛沢東主席と周恩来総理が主張した「中日友好論」を支持したという。しかし、判断基準が多様化している「80後」にとっては、国家指導者の権威性は弱体化しているといえよう。

2005年当時注目された「反日」スローガンを「80後」の視点で検討してみよう。例えば「友好はいらない、日本と戦おう」というスローガンは、戦争や飢餓の経験、冷戦時代の「恐怖の中の平和」の記憶もない「80後」が、平和と友好の大切さを十分に理解していないと考える。「日本製品をボイコットしよう」は、改革・開放政策とともに成長し「鎖国」の弊害を経験

したことがない「80後」が、中国経済の高度成長に過剰な誇りと自信をもっていると考える。さらに「親日の××は裏切り者だ」などのフレーズには、自己中心的であるために他人との交流が苦手で、異なる意見を許容できない「80後」の特徴が表れている。加えて指摘しておきたいのは、インターネットを自在に操る「80後」が時差のない情報を受容している一方で、インターネットの奴隷と化し、冷静な分析や判断力が低下している点である。

報告者自身の記憶と体験を中心に中国の「80後」について考察したが、「80後」の日本観は以上のような「二重構造」をなしており、「二重構造」を「矛盾」として認識せず、並存するものとして受容していることこそが新世代「80後」の特徴であるといえよう。

【記事執筆：及川 淳子

(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】

East Asian Culture Research Meeting: report
Academic Frontier Sub-project 2: Japan as
an 'Other' Culture

6th East Asian Culture Research
Meeting of 2009

“New Era of Japanese-Chinese
Relations ‘Post-80s’: an Examina-
tion of *Chinese, Who Actually Admire
Japanese*”

Speaker SHI Zong Ei (Foreign Guest Researcher,
Hosei University Research Center for
International Japanese Studies; Research
Assistant, Europe-Asia Social Develop-
ment Institute, Development Research
Center of the State Council, China)

Date Saturday, 20 August 2009, 18:00-20:00

Venue Hosei University Ichigaya Campus, '80
Building 7F, Large Meeting Room 1

Chair WANG Min (Professor, Hosei University
Research Center for International Japa-
nese Studies)

In China, how is Japan, an 'other' culture, perceived?

What kind of era will the 'Post 80s' new era supporting Japanese-Chinese exchange be? This report used an examination of WANG Min's *Chinese, Who Actually Admire Japanese: an Analysis of Deep-lying "Anti-Japanese Sentiment"* (PHP Shinsho, 2005), in order to reflect upon 'Post 80s' China, focusing on the speaker's own memories and experiences.

The 'Post 80s' view of Japan is dual-structured. There is a strong admiration for Japan due to a mania for Japanese "content" such as Manga comics, animations, games and drama. On the other hand, the 'Post 80s' grandparent generation experienced the war, and it is a fact that they continue to pass down war reminiscences as "family tales".

Other problems are that characteristics of the 'Post 80s' era were revealed in the 'anti-Japanese' slogans which drew attention back in 2005, and balanced powers of analysis and judgment have declined under the influence of the internet. The fact that the 'dual-structured' view of Japan is not perceived as a 'contradiction', but is accepted as a case of coexisting phenomena, is also a sign of the 'Post 80s' new era.

Report by OIKAWA Junko (Guest Scholar, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

东亚文化研究会报告
学术开拓推进项目②作为异文化的日本
2009年第6次东亚文化研究会
“日中交流的新一代·‘80后’——对《实际上憧憬着日本的中国人》一书的探讨”

报告人：谢宗睿（法政大学国际日本学研究所外国人客员研究员・中国国务院发展研究中心欧亚社会发展研究所助理研究员）
时间：2009年08月20日（周四）18：00-20：00
地点：法政大学市ヶ谷校区80年馆7层大会议室1（角）
主持人：王敏（法政大学国际日本学研究所教授）

中国究竟是如何将日本作为异文化来认识的？担当着未来日中交流重任的新一代——“80后”到底又是怎样的一代人？在此次研究会上，谢宗睿先生结合王敏教

授的著作《实际上憧憬着日本的中国人》一书，以自身的记忆和体验为线索，对中国的“80后”进行了剖析。

谢宗睿先生认为，中国的“80后”具有着“双重构造”的日本观。“80后”们一方面热衷于日本的漫画、动画片、电子游戏、电视连续剧等流行文化。另一方面，由于“80后”的祖辈们经历过那场不幸的战争，而这些战争中的悲惨记忆又往往会以“家族往事”的形式口耳相传，在“80后”们年幼之时就烙印在其心灵之中了。

2005年那场“反日”游行中出现的标语口号，实际上就充分体现出了“80后”这一代人的特点，同时也暴露出“80后”们深受互联网的影响而缺乏冷静分析和独立判断能力的缺陷。实际上，“80后”们似乎并不认为这种“双重构造”的日本观是一种“矛盾”，反而并行不悖的接纳了这种“双重构造”的日本观。而这一点本身，也正是“80后”的新一代所独有的特征。

【执笔人：及川 淳子
（法政大学国际日本学研究所客员学术研究员）】

동아시아문화연구회 보고
학술 프론티어·서브프로젝트② 이문화로서의 일본
2009년도 제6회 동아시아문화연구회
일·중 교류의 신세대·「80 이후」~
『본심으로는 일본을 동경하는 중국인』의 검증~

- 보고자 샤소에이(謝宗睿, 호세이대학(法政大学) 국제일본학연구소 외국인 객원 연구원·중국국무원발전연구센터 유럽·아시아사회발전연구소 조리(助理) 연구원)
- 일 시 2009년 8월 20일(목) 18시 00분 ~ 20시 00분
- 장 소 호세이대학(法政大学) 이치가야 캠퍼스 80년관 7층 대회의실 1(角)
- 사 회 왕민(王敏, 호세이대학 국제일본학연구소 교수)

중국은 이문화로서의 일본을 어떻게 인식하고 있는가. 향후 일본과 중국의 교류를 담당할 신세대「80 이후」는 어떤 세대인가. 이번 보고에서는 왕민저『본심으로는 일본을 동경하는 중국인—“반일감정”의 심층분석』(PHP 신서, 2005년)의 검증과 함께 보고자의 기억과 체험을 중심으로 중국의「80 이후」에 관해 고찰했다.

「80 이후」의 일본관은「이중구조」를 갖고 있다. 이들은 만화, 애니메이션, 게임, 드라마 등 일본의 콘텐츠에 열광하며, 일본에 대한 강한 동경을 품고 있다. 반면, 「80 이후」의 조부모 세대는 전쟁 경험자로, 전쟁의 기억이「가족 이야기」로 전해지고 있는 것 또한 사실이다.

2005년 당시 주목되었던「반일」슬로우건에는「80 이후」세대의 특징이 잘 나타나 있는데, 인터넷의 영향으로 냉정한 분석이나 판단력이 저하되었다는 문제점도 배제할 수 없다. 일본관에 관한「이중구조」를「모순」으로 인식하지 않고, 병존하는 사실로 수용하고 있다는 점 또한「80 이후」의 특징이다.

【기사 집필：오이카와 준코(及川 淳子, 호세이대학 국제일본학연구소 객원 학술연구원)】

2009 年度第 7 回東アジア文化研究会

「新しいペリー像・松陰像へのアプローチ

—— 米国側の史料から見た下田密航の真相 ——

陶 徳民 (関西大学文化交渉学教育研究
拠点リーダー・同文学部教授)

- 日 時：2009 年 10 月 6 日 (火) 18 時 30 分～20 時 30 分
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス ポアソナード・タワー 8 階 0805 教室
- 司 会：王 敏 (法政大学国際日本学研究所教授)

(一) 旗艦上の 45 分間

今年 2 月 9 日、首都ワシントンにあるアメリカ国立公文書館で海軍省関係のアーカイブを調査した時、ペリーの旗艦ポウハタン号の航海日誌第 2 巻 (1853 年 9 月 11 日 - 1854 年 9 月 7 日) 1854 年 4 月 25 日のページから、吉田松陰と金子重輔の下田密航に関係する記事を見つけた。記者はポウハタン号の艦長 W. J. マクルーニー大佐であり、記載内容と私なりの日本語訳は次の通りである。

Remarks of This 25 Day of April 1854

Shimoda

Commences at 2.45 two Japanese came on board by a small boat, remained about 3/4 of an hour, on getting aboard their boat got adrift & they were sent ashore in the S' (Steamer's) cutter by order of the Commo. (Commodore). ※ 括弧中の内容は括弧直前の略式表現を解説した結果

下 田

(午前) 2 時 45 分、二人の日本人が小船で乗艦してきて、約 45 分間滞留した。乗艦した際、彼らの小船が漂失したため、提督の指示で本艦の小船で岸辺へ送還された。

下田密航の際、松陰ら二人がいつペリーの旗艦に登り、どのくらい艦上に滞留して送還されたのかは、長い間謎であった。この記述は、何時何分という細部まで確定できる非常に貴重な史料である。現代の感覚な

ら、西暦 4 月 25 日未明に起きたこの事件を和暦で記載する場合、3 月 28 日のことになるはずだが、しかし、密航失敗後の松陰は『回顧録』でそれを「三月二十七夜」の行動として記録した。江戸時代では一般的に午前零時ではなく、夜明けをもって一日の始まりとしていたからである。そして、旗艦上の一場面として、「時に鐘を打つ、凡そ夷船中、夜は時の鐘を打つ。余曰く、日本の何時ぞ、ウリヤムズ指を屈して此れを計る。然れども答詞詳かならず〔頭注：此の鐘は七ツ時なるべし〕」と記し、ペリーの首席通訳官 S.W. ウィリアムズの尋問を受け、やりとりが最終段階に入ろうとした時間を「七ツ時」と推定した。当日下田における「日の出」時間で計算すると、「七ツ時」の始まりが約 3 時 14 分になる。とすれば、松陰の推定は 3 時 30 分に送還されたというマクルーニー艦長の記載と合致している。このことから、少年時代より萩藩の兵学師範 (軍事教官) として育てられ、江戸において蘭学の師、佐久間象山の薫陶も受けた松陰の厳格な時間観念と優れた記憶力が裏付けられたと言える。

(二) 「人道心」をめぐる松陰とペリーの攻防

ところで、下田密航に関する従来の研究に一つの盲点があり、それは「人道心」をめぐる松陰とペリーの攻防という重要なポイントが見逃されたことである。アメリカ議会の公式文書である『ペリー艦隊日本遠征記』によれば、松陰 (おそらく象山のアドバイスも得た) が密航成功のため、事前に渡している「投夷書」でも、旗艦上でやりとりの時にもアメリカ人の「人道心」に訴える戦略を取っていたという。すなわちウィリアムズがペリーの意思を受けて「2 人が日本政府から許可を受けるまでは、受け入れを拒絶せざるをえな



陶 徳民 氏



会場の様子

いが、艦隊は下田港にしばらく滞在する予定だから、許可を求める機会は十分にあるだろうと言って聞かせた。提督の回答に2人は大変動揺して、陸に戻れば首を斬られることになるかと断言し、とどまることを許してもらいたいと熱心に懇願した。この願いはきっぱりと、しかし思いやりを込めて拒絶された。長い話し合いが続いた。彼らは自分たちを支持してくれるようあらん限りの議論をつくり、アメリカ人の人道心に訴え続けた。」と (F. L. ホークス編・オフィス宮崎訳『ペリー艦隊日本遠征記』栄光教育文化研究所、1997年、第1巻421頁)。注意すべきは、ここの「人道心」という表現は現代日本語の訳語であり、『遠征記』における英語の原語は“humanity”で、一方、「投夷書」に使われている漢語表現は「仁厚愛物之意」であった。

いずれにせよ、松陰の戦略はある程度奏功したようである。ペリーは、日米和親条約締結直後で幕府との信頼関係が損なわれるおそれがあるため、松陰の密航要求を拒否したが、松陰の知的好奇心を非常に高く評価し、このような若者がいるのなら、将来、日本は先進国への仲間入りがきくと実現できるだろうと考えた。そして、約一週間後、下田獄に繋がれていた松陰の嘆願書(「第二の投夷書」と私は名づけたが)を知り、「提督は、2人の日本人が投獄されていることという報告を受けると、旗艦付副官を陸上に派遣し、2人が艦を訪れた者と同じ人物であるかどうかを非公式に確認させた。」しかし、松陰ら二人が副官の到着前に江戸に移送されたため、「哀れな2人の運命がどう

なったのか、確かめることはまったくできなかったが、当局者が寛大であり、斬首という最も重い刑に処すことのないように望む。なぜなら、並はずれて残忍な日本の法典によれば大罪であっても、われわれには自由で大いに参照すべき好奇心の発露としか見えないからである。ちなみに、提督からの問いに答えて、当局が深刻な結末を懸念する必要はないと保証したことは、せめてもの慰めであった(同上、423頁)。これによって見れば、「人道心」と「惻隱の情」が動いたペリーは、鎖国の禁令に触れた松陰の罪に対する日本の当局者の量刑を干渉したようで、しかも、斬首刑には処しないという約束を得たため、安心したそうである。

【報告記事：陶 徳民(関西大学文化交渉学 教育研究拠点
リーダー・同文学部教授)】

参考文献(拙稿)

- 「ペリーの旗艦に登った松陰の「時間」に迫る — ポウハタン号の航海日誌に見た下田密航関連記事について」
関西大学『東アジア文化交渉研究』第2号、2008年3月
- 「下田密航前後における松陰の西洋認識 — 米国に残る「投夷書」をめぐる —」、藤原書店『環』第13号、2003年5月。
- 「下田獄における第二の「投夷書」について — 松陰の覚悟に対するペリー側の共感 —」、藤原書店『環』第14号、2003年7月

East Asian Culture Research Meeting: report Academic Frontier Sub-project 2: Japan as an 'Other' Culture

7th East Asian Culture Research Meeting of 2009

“Approaching New Images of Perry and Shoin: The Truth about the Shimoda Stowaway Incident as seen from American Historical Sources”

Speaker TAO Demin (Director, Kansai University Institute for Cultural Interaction Studies; Professor, Faculty of Letters)

Date Tuesday, 6 October 2009, 18:30-20:30

Venue Hosei University Ichigaya Campus, Boissonade Tower 8F Classroom 0805

Chair WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

The Shimoda Stowaway Incident took place before dawn on 25 April 1854 (28th of the 3rd month in the lunar calendar). At what time Yoshida Shoin and Kaneko Jusuke boarded Perry's flagship, and for how long they were there before being sent back, has long been an enigma. I discovered records relating to a logbook housed in the

American National Archives which indicated that the two men boarded at 2:45 in the morning, and were discharged at 3:30. This is in agreement with Shoin's *Memoirs* which gives “the 7th hour” (which begins at approximately 3:15). Shoin had been brought up from an early age as a master of military science in Hagi Fief, and had also received training in Edo from the teacher of Rangaku (Western studies), Sakuma Shozan: proof of his strict sense of time and excellent powers of memory.

On the other side, according to the formal document of the American Assembly, “Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan”, Shoin succeeded in stealing passage, and had tried to appeal to the “humanity” of the Americans in drawing up the “Toisho” (request for passage) which had already been handed over, and now while being questioned onboard ship. His strategy worked: Perry refused Shoin's request for passage for fear of breaking trust with the Bakufu straight after concluding the Japan-America Treaty of Peace and Amity, but roughly a week later in the Shimoda Straits he got news of Shoin's petition, and it is said that he negotiated with the Japanese authorities an assessment of the case relating to Shoin's contravening of the isolation order, and having received assurance that it would not result in his beheading, was at last content.

Report by TAO Demin (Director, Kansai University Institute for Cultural Interaction Studies; Professor, Faculty of Letters)

东亚文化研究会报告
学术开拓推进项目②作为异文化的日本
2009年第7次东亚文化研究会

“不为人所知的佩里·松荫——美国史料中的下田偷渡真相”

报告人：陶 德民（关西大学文化交涉学教育基地
负责人·文学部教授）

时 间：2009年10月06日（周二）18：30-20：30

地 点：法政大学市ヶ谷校区布瓦索纳德大楼8
层 0805教室

主持人：王 敏（法政大学国际日本学研究所 教授）

公元1854年04月25日（农历03月28日）凌晨，吉田松荫和金子重辅二人偷偷地登上了佩里舰队的旗舰，试图偷渡前往美国。但是，他们究竟于几点几分登上佩里舰队的旗舰，在舰上逗留了多长时间后才被遣返？这些问题，长期以来都是困扰着学界的一个谜团。为此，笔者特意寻找到了现藏于美国国立公文馆的当年的航海日志，通过查询相关记录可以认定，吉田松荫和金子重辅二人是于凌晨2时45分登舰，3时30分被遣返的。这一点与吉田松荫所著《回顾录》中“七瞬间”

一文（该文的记述始于凌晨约3时14分）的记载完全吻合。由此可见，吉田松荫具有严格的时间观念和惊人的记忆力。而这正是得益于其少年时代所接受的兵学教育和在江户时所师从的兰学大师佐久间象山的言传身教。

另一方面，据美国国会正式公文《佩里舰队日本远征记》记载，吉田松荫为了偷渡的成功，决定采取以触动美国人的“人道主义”情结为主的策略。因此，无论是在撰写事前递交给佩里舰队的《投夷书》时，还是在旗舰上接受质询时，吉田松荫都始终尝试着去打动美国人的“人道心”。而吉田松荫的这一策略最终也收到了成效。由于此时正值美国刚刚与幕府签订了《日美和亲条约》，佩里因担心有损于与幕府之间刚刚建立起来的信任关系，所以拒绝了吉田松荫的偷渡请求。被佩里遣返的吉田松荫随即因触犯锁国禁令而被日本当局拘押于下田的监狱之中。在大约一周后，当佩里看到吉田松荫在狱中撰写的请愿书后，马上向日本当局施加压力，要求日本当局不得对吉田松荫施以斩首之刑。直到得到了日本当局的承诺之后，佩里才最终放下心来。由此可以说，吉田松荫对美国人采取的“人道心”策略取得了良好的效果。

【执笔者：陶 德民（关西大学文化交涉学
教育基地负责人·文学部教授）】

동아시아문화연구회 보고
학술 프론티어·서브프로젝트② 이문화로
서의 일본

2009년도 제7회 동아시아문화연구회

새로운 페리상·쇼인(松蔭) 상의 모
색을 위한 어프로치-미국 사료(史料)
를 통해 본 시모다(下田) 밀항
의 진상

- 보고자 타오 더민씨(陶 德民, 간사이대학(關西大学) 문화교섭학 교육거점리더·문학부 교수)
- 일 시 2009년 10월 6일(화) 18시 30분 ~ 20시 30분
- 장 소 호세이대학(法政大学) 이치가야 캠퍼스 보아소나드타워 8층 0805교실
- 사 회 왕 민(王 敏, 호세이대학 국제일본학연구소 교수)

1854년 4월 25일(음력 3월 28일) 미명에 이루어진 시모다(下田) 밀항 당시, 요시다 쇼인(吉田松蔭)과 가네코 시게노스케(金子重輔)가 언제 페리의 기함(旗艦)에 승선하였으며, 송환되기까지 어느

정도 체류했는지에 관해서는 오랫동안 의문으로 남아 있었다. 필자는 미국국립공문서관이 소장한 항해일지 관계 기록을 발견해, 두 사람은 오전 2시 45분에 승선하여 3시 30분에 하선했음을 밝혀냈다. 이는 쇼인의 『회고록』에 「4시」(시작은 약 3시 14분)로 기록되어 있는 것과 일치하는데, 소년시절부터 하기번(萩藩)의 병학사범(兵学師範)으로 성장하였으며, 또한 에도(江戸)에서 난학(蘭学)의 스승인 사쿠마 쇼잔(佐久間象山)의 가르침을 받았던 쇼인의 엄격한 시간관념과 뛰어난 기억력을 뒷받침하고 있다.

한편, 미국 의회의 공식문서인 『페리 함대 일본 원정기』에 의하면, 쇼인은 밀항을 성공시키기 위해, 사전에 건넨 「투이서(投夷書)」의 작성시에도, 기함에서 심문을 받을 때에도 미국인의 「인도적인 심성」에 호소하는 전략을 취했다고 한다. 그 전략은 적중했다. 일미화친조약 체결 직후로 막부(幕府)와의 신뢰 관계가 훼손될 것을 우려한 페리는 쇼인의 밀항 요구를 거부했다. 그러나, 그는 약 일주일 뒤 시모다 감옥에 묶어 놓은 쇼인의 탄원서를 발견한 후, 쇄국령을 어긴 쇼인의 죄를 처벌하는 일본 당국자와 형량을 조정하여 참수형에는 처하지 않는다는 약속을 받아내고 가까스로 안심했다고 한다.

【기사 집필：타오 더민(陶 德民, 간사이대학(關西大学) 문화교섭학 교육거점리더·문학부 교수)】

学術フロンティア・サブプロジェクト② 異文化としての日本

2009年度第8回東アジア文化研究会

「戦後日本史を美術で考える」

海上 雅臣 (国際美術評論家連盟会員、株式会社ウナクトウキョウ主宰)

- 日 時：2009年11月24日(火) 18時30分～20時30分
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館2階 国際日本学研究所 セミナー室
- 司 会：王 敏 (法政大学国際日本学研究所教授)

これは、書画だ！ 書と画に分けられない「書のような画」、「画のような書」という芸術だ！

破天荒な書家、井上有一の筆墨作品はどれもこれも胸に迫ってくる。その有一が、ここ数年、ルネサンス以降の芸術家を厳選し発刊し続けている中国の叢書『世界名画家全集』（河北教育出版社）に収録された。ピカソやロダンはじめシリーズで取り上げる101人のほとんどが西洋人で、日本から選ばれたのは井上だけである。その『井上有一』（海上雅臣著、楊晶・李建華訳）の刊行はこの10月のことで、中国の芸術界に衝撃を与えた。

漢字の国の中国は、書に対して「保守的」とも思われるところがある。書聖・王羲之の書の道は今も揺るがない。改革開放は経済や政治が主な舞台だ。若者たちのハートをつかんだポップカルチャーやファッションは変化の先取りをしているが、文化・芸術における古来の規範や規則にかかわる部分は概して変化から取り残されると思われる。

有一を世界に向けて紹介し続ける国際派美術評論家の海上雅臣氏は「中国で書はルールに沿ったものが当然視される。有一は極端に異質だから『全集』に入ったのだろう」と指摘するが、私もその通りと思う。

海上雅臣氏に招かれて有一の作品を拝覧する機会があった。「貧」の字が「貧」に見えなかった。堂々と両腕を天に突き上げて深呼吸している人間と錯覚した。1メートル四方の台からはみだして歩き出しそうに感じた。ふしぎな臨場感に襲われたことを忘れられない。その感覚で有一の作品集を手にとると、字の一つひとつが生きている人物になって、作品集から飛び出して来そうに感じるから、困って困って、何度か目をつむったのである。

有一の人生の転機となったのが東京大空襲の仮死体験というのは、あまりにも有名な話だ。一度は諦観し

た死んだ命の再生の瞬間ほどエネルギーな生命力を放つときはない。甦った有一はその後生きる限り生命の質を落さずに書に向かったのだろう。有一は自らの生き方を「愚徹」と言う。飾らないその精神は、老荘思想に通じる「愚徹」そのものだ。これは、有一が宮沢賢治を慕っていた根源でもある。

賢治は「雨ニモマケズ」の詩を「デクノボー……二、ワタシハナリタイ」と締めくくった。有一は校長への適格審査で趣味を聞かれて、洋服のポケットから賢治の詩を写したノートを取り出して、教育委員会の人たちに見せたという逸話があるそうだ。おそらく有一はふだんからしばしば賢治と一体になる感覚があったのだろう。クレヨン書きらしいが、「雨ニモマケズ……」の詩も「なめとこ山の熊」の童話も、その作品からは時間と空間を超越した七変化のキャラクターがはねて飛び出してくるようだ。舞っている、はねている、歌っている、トントントントン。周りを陽気にさせるたくさんの賢治たちが見えるようだ……。

賢治は、じつは西洋近代化に走る当時の日本が古きよきふるさつを見失いかけていることを見抜いて、童話に託して呼び覚まそうとしたのである。有一も若いころ西洋画をのぞいたりした挙句、東洋古来の書を認識して遍歴は止まる。見逃しがちな東洋の美の原点にあたる再発見であり、現代日本人の精神の深層に構造的に内蔵されているながら自覚されていない蘇りのようなものだ。終生、書に固執したのは書が創り出すダイナミズムを自分自身に、日本人に思い出してほしかったのだろう。それを「前衛書」と評価したのはただ周りの事情にすぎない。きっと本人が感情をほとばしらせることができたのが「書」だったにすぎないのであろう。

書をもって感性の世界を「描く」ことができた。言葉を通り越して概念を抽出化した。理屈抜きに主張を



左より王教授（法政大学）、海上氏、陣内教授（法政大学）



会場の様子

理路整然と並べることができた。ここに至るまでの過程で、有一は伝統的権威とされる規範を本能的にはみだし、絵画に近づくことで五感を表現した。表現したもの、体の内奥から湧き出てくる感性を書き続けた。賢治の「オロオロアルキ」のように、「書・書く」という行為を繰り返した。

こうして有一は中国の伝統的書法の境界を超えた新しい「書法」を体現した。書と漢字と日本的繊細な感性を一体化させ、書と絵画の境界をなくした有一だ。中国生まれの書法が伝承され、日本人の有一によってこのように昇華した。中国人は驚いた！有一の目指したものは中国人にもすなおに伝わるにちがいない。

『井上有一』はB5版で約230ページ。写真も多く、作品は約100点を収めている。中国『世界名画家全集』シリーズでも、井上有一はいつまでも輝くにちがいない。

中国で放たれた有一の「異彩」は日本文化の発信になる。発信と受信の互換を可能にした交信者は海上雅臣氏である。

現代の日本人にとって生活史の原点が戦後だとすれば、海上雅臣氏は井上有一という書家の遍歴を軸にまとめ、その可能性を見せてくれた。

【記事執筆：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）】

East Asian Culture Research Meeting: report Academic Frontier Sub-project 2: Japan as an 'Other' Culture

8th East Asian Culture Research Meeting of 2009

“Considering Post-War Japanese History through Art”

Speaker	UNAGAMI Masaomi (Member, International Association of Art Critics; President, Unac Tokyo PLC)
Date	Tuesday, 24 November 2009, 18:30-20:30
Venue	Hosei University Ichigaya Campus, '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room
Chair	WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

The Hosei University Research Center for International Japanese Studies 8th East Asian Culture Research Meeting of 2009 was held on Tuesday, 24 November of last year from 18:30-20:30 in the Hosei University Re-

search Center for International Japanese Studies Seminar Room (Chiyoda Ward, Tokyo). On this occasion we welcomed International Association of Art Critics Member and Unac Tokyo PLC President, UNAGAMI Masaomi, and conducted the meeting on the theme of “Considering Post-War Japanese History through Art”.

The focus was on calligrapher, who was independent and gained international acclaim as standard-bearer for “avant-garde calligraphy”, INOUE Yuichi (1916-1985). We were enlightened to the art of calligraphy, by tracing along the locus from traditional calligraphic methods to the boundaries of his own unique style. This provided a faithful depiction of the process involved in the birth of a new aspect within an art. We also heard of Inoue's reputation in China, the motherland of calligraphy, as artist representative of Japan, and a report was given on the extent to which Japanese culture has spread in China by way of the calligrapher, Inoue Yuichi. Furthermore we learnt of the importance of the fact that war defeat in 1945, the historical starting point in the lives of present-day Japanese, marked the birth of Inoue's calligraphy.

Report by SUZUMURA Yusuke (Guest Scholar, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

东亚文化研究会报告 学术开拓推进项目②作为异文化的日本 2009 年第 8 次东亚文化研究会 “以美术的视角来考察战后日本史”

报告人：海上 雅臣（国际美术评论家联盟会员・
ウナツク东京有限责任公司创始人）
时 间：2009 年 11 月 24 日（周二）18：30-20：30
地 点：法政大学市ヶ谷校区 58 年馆 2 层国际日
本学研究所研究室
主持人：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）

法政大学国际日本学研究所 2009 年度第 8 次东亚文化研究会于 2009 年 11 月 24 日（周二）18 时 30 分至 20 时 30 分，在法政大学国际日本学研究所研究室（东京・千代田区）举行。在此次研究会上，国际美术评论家联盟会员、ウナツク东京有限责任公司创始人海上雅臣先生作了题为“以美术的视角来考察战后日本

史”的演讲。

在演讲中，海上雅臣先生主要以作为“先锋派书法”的领军人物而在国际上享有盛名的民间书法家井上有一（公元 1916—1985 年）为考察对象，通过追溯其一生从对书法有所感悟，到超越传统的书法而独树一帜、自成一家的艺术轨迹，清晰地描绘出了一幅全新艺术表现手法从萌芽到诞生的全景图。此外，海上雅臣先生还介绍了井上有一作为日本具有代表性的书法家，在书法的发祥地中国所受到的高度评价，并通过井上有一这位书法家，展现出日本的文化是如何在中国广为流传的。同时，海上雅臣先生还特别指出，公元 1945 年，日本在第二次世界大战中战败。这一年既是现代日本人生活史的起点，也可以说是井上有一书法的诞生年。因此，对于其中所包含着的重要意义，必须有更加深刻全面的认识。

【执笔人：铃村 裕辅

（法政大学国际日本学研究所客员学术研究员）】

동아시아문화연구회 보고 학술 프론티어·서브프로젝트② 이문화로 서의 일본 2009 년도 제 8 회 동아시아문화연구회 「전후 일본사를 미술을 통해 고찰하다」

- 보고자 우나가미 마사오미 (海上 雅臣, 국제미술평론가연맹 회원, 주식회사 UNAC TOKYO 주재)
- 일 시 2009년 11월 24일(화) 18시 30분 ~ 20시 30분
- 장 소 호세이대학 (法政大学) 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실
- 사 회 왕 민 (王 敏, 호세이대학 국제일본학연구소 교수)

지난 2009년 11월 24일 (화) 18시 30분부터 20시 30분까지 호세이대학 국제일본학연구소 세미나실 (도쿄·치요다구 (千代田区) 에서 호세이대학

국제일본학연구소 2009년도 제 8 회 동아시아연구회가 개최되었다. 이번 연구회는 국제미술평론가연맹 회원이며, 주식회사 UNAC TOKYO 주재인 우나가미 마사오미씨를 초청하여, 「전후 일본사를 미술을 통해 고찰하다」라는 제목으로 진행되었다.

재야 서예가이며 「전위 서도」의 기수로서 국제적인 명성을 떨친 이노우에 유이치 (井上有一, 1916-1985) 를 대상으로, 서도라는 예술에 눈떠 전통적인 서법을 넘어 독자적인 영역에 도달하기까지의 그의 궤적을 따라감으로 인해서 예술의 새로운 지평이 열려 가는 과정이 자세히 소개되었다.

또한, 이노우에 (井上) 가 서도의 중주국인 중국에서 일본을 대표하는 예술가로 평가되고 있다는 점도 소개되었으며, 이노우에 유이치라고 하는 서예가를 통해서 일본의 문화가 어떤 형태로 중국에 확산되어 있는지에 관한 중국 현황이 보고되었다. 그리고, 현재 일본인 생활사의 원점인 1945년의 패전이 이노우에 서도를 탄생시켰다는 사실이 갖는 중요성도 지적되었다.

【기사 집필：스즈무라 유스케 (鈴村 裕輔,

호세이대학 국제일본학연구소 객원 학술연구원)】

2009 年度第 9 回東アジア文化研究会

「宮沢賢治は日本人として生まれて損をしたのか？」

ロジャー・パルバース (東京工業大学世界文明センター)
長・作家・劇作家・演出家

- 日 時：2009 年 12 月 8 日 (火) 18 時 30 分～20 時 40 分
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所 セミナー室
- 司 会：王 敏 (法政大学国際日本学研究所教授)

去る 2009 年 12 月 8 日 (火)、18 時 30 分から 20 時 40 分にかけて、法政大学国際日本学研究所セミナー室 (東京・千代田区) において、法政大学国際日本学研究所 2009 年度第 9 回東アジア文化研究会が開催された。今回は、東京工業大学教授で作家、劇作家、演出家のロジャー・パルバース氏を迎え、「宮沢賢治は日本人として生まれて損をしたのか？」と題して行われた。

パルバース氏は 1944 年にアメリカ合衆国ニューヨーク市に生まれ、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、ハーバード大学大学院で学び、1967 年初来日。以後、数度の来日を経て現在は東京工業大学世界文明センター長を務める。この間、1976 年にはオーストラリア国籍を取得したほか、1970 年代から宮沢賢治の作品の英訳を行っている。2008 年には、長年の宮沢作品の翻訳と研究に対し、第 18 回宮沢賢治賞が贈られた。

報告の概要は以下のとおりである。

現在では想像できないかもしれないが、1967 年の初来日当時、宮沢賢治は日本の文壇において、「二流作家」として位置づけられていた。国内の扱いがこのようなものであったから、世界的に見ても宮沢賢治を研究する学者はほとんどおらず、スウェーデン人研究者のケルスティン・ヴィデーウスが唯一の例外といってよいほどであった。パルバース氏によれば、その理由は、次の 8 つの点に求められる。

- ① 方言を使用したこと
- ② 表現が独特であったこと
- ③ 宗教用語と宗教概念を多用したこと
- ④ 自然科学用語を多用したこと
- ⑤ 作品中に「日本」や「日本人」という言葉や要

素が出てこないこと

- ⑥ 作品中に恋愛や男女の交わりが描かれないこと
- ⑦ 「20 世紀的要素」がなかったこと
- ⑧ 人間と植物や動物の関係の密接さを説いたこと

このうち、方言については、使用頻度は決して多くなかったものの方言を利用するということが自体が中央の文壇にとっては「田舎者の作品」とみなすのに十分な証拠であった。また、表現の独自性は、他者による模倣を許さないという点で絵画におけるフェルメールと同じであったが、模倣されないがために追従者を生み出すこともなかった。しかし、生前に「一人前の作家になる」という希望を果たせなかったことは、出版社の編集者による手垢がつかなかったという点で、宮沢賢治とその作品にとっては「作品がそのまま残される」という望ましい結果をもたらした。

③の宗教用語と宗教概念の多用については、その道徳的な要素の強さのために、無宗教的な日本人に敬遠されることとなった。宮沢賢治が自然科学用語を多用したのは、彼が「詩人」であることを拒み、「自然の記録者」であることを望んだことの証である。しかし、これによって、宮沢賢治の作品は日本の叙情詩の伝統的な作法と異なることになり、そのため、読者や批評家たちの理解を得ることが難しくなってしまった。

宮沢賢治が生きたのは日本が軍国主義と愛国主義の渦中にあった時代であったが、そのような周囲の状況にもかかわらず作品中に「日本」や「日本人」といった要素がまったく現れなかったために、彼の作品は同時代人の理解の範疇外に置かれることとなった。同様に、何らかの形で恋愛や男女の交わりという要素もっていた当時の日本の作家たちの中では異色の存在であったことが、周囲の理解を妨げることになった。



ロジャー・パルバース 氏



会場の様子

一方、1896年という19世紀の末に生まれ、1933年に没した宮沢賢治であったが、彼の作品には「大量生産、大量消費」といった20世紀的要素がなかった。むしろ、彼が説いたのは人間と自然の関係であり、あるいは従来の行動様式を完全に変えなければ人類は滅びる以外にないという「予言」を作品の形で残した。その点で、宮沢賢治の作品には「20世紀的要素」がなく、21世紀の問題を先取りしていたのである。しかし、それゆえに、同時代の人々の共感を得ることは少なく、彼が注目を浴びるようになったのは、現代社会が限界を迎えた、20世紀末になってからなのであった。

このように考えるとき、われわれは「宮沢賢治は日本人として生まれて損をしたのか？」というパルバーズ氏の立てた問いにどのように答えることができるだろうか。パルバーズ氏の答えは、「宮沢賢治は日本

人として生まれて損をしたのではない。19世紀という時代に生まれ、20世紀に生きたことで損をしたのだ」というものであった。

パルバーズ氏によるこの問いと答えは、「20世紀に生きたからこそ21世紀を予見したと評価されるが、21世紀的な発想をもっていたために20世紀の人々には理解されなかった」と言い換えることができる。そのように考えるとき、今回の報告は、「大作家になろう」と志すもついにその願いを果たすことのできなかったその一生の皮肉さと無念さばかりでなく、「今日、宮沢賢治の作品が単に日本人のみならず世界の人々にも影響を与えるのはなぜか」という問いに対する答えでもあるといえるだろう。

【記事報告：鈴木 裕輔

(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】

East Asian Culture Research Meeting: report Academic Frontier Sub-project 2: Japan as an 'Other' Culture 9th East Asian Culture Research Meeting of 2009

“Did Miyazawa Kenji lose out being born Japanese?”

Speaker	Roger PULVERS (Tokyo Institute of Technology Head of Center for the Study of World Civilizations; Writer, Playwright, Performer)
Date	Tuesday, 8 December 2009, 18:30-20:40
Venue	Hosei University Ichigaya Campus, '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room
Chair	WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

The Hosei University Research Center for International Japanese Studies 9th East Asian Culture Research Meeting of 2009 was held on Tuesday, 8 December of last year from 18:30-20:40 in the Hosei University Research

Center for International Japanese Studies Seminar Room (Chiyoda Ward, Tokyo). On this occasion we welcomed Professor of Tokyo Institute of Technology, Roger PULVERS, and conducted the meeting on the theme of “Did Miyazawa Kenji lose out being born Japanese?”.

Professor Pulvers gave the following eight reasons for Miyazawa Kenji's lengthy minor position in the Japanese literary world. They are: 1) his use of dialect, 2) expressions peculiar to himself, 3) his abundant use of religious terms and religious themes, 4) his abundant use of language from the natural sciences, 5) the lack of the words and concepts “Japan” and “Japanese” in his works, 6) the lack of portrayal of romance and man-woman relationships, 7) the lack of “20th-century concepts”, and 8) his explanations of the close relationship between humans, plants and animals.

The answer to the question, “Did Miyazawa Kenji lose out being born Japanese?”, was that “Miyazawa Kenji did not lose out being born Japanese. He lost out by being born in the 19th century, and living in the 20th century”. This could also be the answer to the question, why do Miyazawa Kenji's works today influence not just Japanese, but people all over the world?

Report by SUZUMURA Yusuke (Guest Scholar, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

东亚文化研究会报告
学术开拓推进项目②作为异文化的日本
2009 年第 9 次东亚文化研究会
“生为日本人对于宫泽贤治而言是一种
损失吗？”

报告人：罗杰·帕鲁巴斯（东京工业大学世界文
明中心负责人·作家·剧作家·表演家）
时 间：2009 年 12 月 8 日（周二）18：30-20：40
地 点：法政大学市ヶ谷校区 58 年馆 2 层国际日
本学研究所研究室
主持人：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）

法政大学国际日本学研究所 2009 年度第 9 次东亚
文化研究会于 2009 年 12 月 08 日（周二）18 时 30 分
至 20 时 40 分，在法政大学国际日本学研究所研究室
（东京·千代田区）举行。在此次研究会上，东京工业
大学教授罗杰·帕鲁巴斯先生作了题为“生为日本人

于宫泽贤治而言是一种损失吗？”的演讲。

罗杰·帕鲁巴斯先生认为，宫泽贤治长期以来都只
不过是日本文坛的一支旁系，其主要原因可以归纳总结
为以下 8 个方面：①大量使用方言；②独特的表现方
式；③大量使用宗教用语和宗教概念；④大量使用自然
科学用语；⑤作品中没有出现过“日本”和“日本人”
等词语和要素；⑥作品中没有描绘过恋爱以及男女之事
等情节；⑦作品中没有“20 世纪的要素”；⑧作品多表
现人类与植物以及动物之间的密切关系。

面对“生为日本人对于宫泽贤治而言是一种损失
吗？”这一命题，罗杰·帕鲁巴斯先生认为，“生为日
本人对于宫泽贤治而言并非一种损失，然而宫泽贤治生
于 19 世纪，却活在 20 世纪，这对于宫泽贤治而言才
是一种损失”。而罗杰·帕鲁巴斯先生的上述观点，似乎
也正好能够回答另外一个重要课题，即“在当今世界，
宫泽贤治的作品为何能够超越日本人的范围，而对世界
各国的人们都产生巨大的影响呢？”

【执笔人：铃村 裕辅
（法政大学国际日本学研究所客员学术研究员）】

동아시아문화연구회 보고
학술 프론티어·서브프로젝트② 이문화로
서의 일본
2009 년도 제 9 회 동아시아문화연구회
「미야자와 겐지 (宮沢賢治) 는 일본
인으로 태어나 손해를 보았는가？」

- 보고자 로저 펄버스(Roger Pulvers, 도쿄공업대학
세계문명센터장·작가·극작가·연출가)
- 일 시 2009 年 12 月 8 日(화) 18 时 30 分 ~
20 时 40 分
- 장 소 호세이대학 (法政大学) 이치가야
캠퍼스 58 年관 2 층 국제일본학연
구소 세미나실
- 사 회 왕 민 (王 敏, 호세이대학 국제일본
학연구소 교수)

지난 2009 年 12 月 8 日 (화) 18 时 30 分부터 20
时 30 分까지 호세이대학 국제일본학연구소 세미나
실 (도쿄·치요다구 (千代田区) 에서 호세이대학 국
제일본학연구소 2009 年도 제 9 회 동아시아연구회가
개최되었다. 이번 연구회는 도쿄공업대학 교수인 로

저 펄버스씨를 초청하여 「미야자와 겐지 (宮沢賢治)
는 일본인으로 태어나 손해를 보았는가？」라는 제목
으로 실시되었다.

펄버스씨는 미야자와 겐지가 오랫동안 일본 문단의
비주류였던 이유를 다음과 같이 여덟 가지로 정리했
다. 즉, ①방언을 사용한 점, ②표현이 독특했던 점,
③종교 용어와 종교 개념을 많이 사용한 점, ④자연과
학 용어를 다수 사용한 점, ⑤작품 중에 「일본」 혹은
「일본인」이라는 말이나 요소가 나오지 않는다는 점,
⑥작품 중에 연애나 남녀의 성적 관계가 묘사되어 있
지 않다는 점, ⑦「20 세기적 요소」가 없었던 점, ⑧
인간과 식물이나 동물과의 밀접한 관계를 설명했다는
점이다.

「미야자와 겐지는 일본인으로 태어나 손해를 보았
는가？」하는 질문에 대한 답은 「미야자와 겐지는 일
본인으로 태어나 손해를 보지 않았다. 19 세기라는 시
대에 태어나 20 세기를 살았기 때문에 손해를 본 것이
다」라는 것이었다. 이는 오늘날 미야자와 겐지의 작
품이 단순히 일본인뿐만 아니라 세계인에게까지 영향
을 미치는 이유는 무엇일까, 하는 질문에 대한 답이기
도 하다.

【기사 집필：스즈무라 유스케 (鈴村 裕辅,
호세이대학 국제일본학연구소 객원 학술연구원)】

法政大学国際日本学研究所

法政大学国際日本学研究所客員学術研究員研究発表会

- 日 時：2009年9月26日（土）13時00分～18時20分
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス ポアソナード・タワー 26階 A会議室
- 発表者（五十音順）：

1. 及川 淳子（13：10～13：55）
「中国における日本研究 — CNKI を活用した文献検索の現状と課題」
2. 申 惠蘭（14：00～14：45）
「韓国における村上春樹文学の展開 — 社会文化的記号としての村上春樹文学 —」
3. 鈴木 裕輔（14：55～15：35）
「分断的な力としてのイデオロギーに対する石橋湛山の批判」
4. 高橋 寿美子（15：50～16：35）
「『日本近代文学』成立過程における異文化の興亡 — 「江戸」対「非江戸」」
5. ソニア・デルマス（16：45～17：25）
「ドゥルーズ哲学における日本映画」
6. 安井 裕司（17：30～18：20）
「日本における国連中心主義と民間国連運動 — ユネスコ運動を中心に」

- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

去る2009年9月26日（土）、13時から18時20分にかけて、法政大学ポアソナード・タワー26階A会議室（東京・千代田区）において、法政大学国際日本学研究所客員学術研究員研究発表会が開催され、及川淳子、申惠蘭、鈴木裕輔、高橋寿美子、ソニア・デルマス、安井裕司の6人が報告を行った。

及川の「中国における日本研究 — CNKI を活用した文献検索の現状と課題 —」では、中国のデータベースCNKI（China National Knowledge Infrastructure）について報告がなされた。主な内容は、①CNKI概要、②日本研究の文献検索の実例、③CNKIの課題、であった。中国の国家プロジェクトとして推進されているCNKIは膨大な情報量を誇り、網羅性という点に強みをもつデータベースだが、収録対象となる学術誌や論文の選定基準や著作権の問題、インターフェースなど、制作・管理する側と利用する側の双方に課題が存することが明らかにされた。また、中国における日本研究の最新動向を理解するためには、様々な課題も含めて、中国の日本研究者がどのようにCNKIを活用し、研究活動を行っているのかを考察することが重要だと指摘された。

申の「韓国における村上春樹文学の展開 — 社会文化的記号としての村上春樹文学 —」は、村上春樹の文学における世界観の特徴と、韓国における村上春樹の文学の受容のあり方が検討された。その結果、村上の文学に現れた世界観は、①言語の背理、②人間に与えられた認識能力の限界、③既存の価値の否定、④活きる論理としての公正さ、に基づいていることが明らかにされた。また、韓国では、戦争体験や「家族イデオロギー」を背景とした政治、戦争、家族、出世を主題とする作品が長らく小説の中心であったが、個人を中心に置く村上の作品が紹介されたことで、特に若い世代の読者の間で高い支持を得た過程が説明された。そして、韓国では村上の作風を模倣する作家たちが現れたが、その作品は家族を中核に据え、家族への希望を内包するものであると指摘された。

鈴木「分断的な力としてのイデオロギーに対する石橋湛山の批判」は、石橋湛山の1920年代から1930年代にかけての議論から、石橋の経済的自由主義と国際協調の重視が国際社会に対するいかなる理解に基づいていたのか、議論の過程でイデオロギーの問題をどのように扱ったのか、を検討した。まず、石橋



会場の様子

は、日本にとって経済的ブロック化よりも自由主義的経済政策を採用することが国益に繋がるとの考え、特に米英両国との連携を重視したことが指摘された。また、1931年の満州事変以降、米英国内では日本を「ファシストが支配する国家」というように、イデオロギー上の敵とみなす傾向が強くなったが、石橋は、「イデオロギーを根底とする絶対主義」は相手を屈服させるまでは満足できないものであり、それゆえに日本と諸外国の協調関係が困難になる、と批判したことが明らかにされた。

高橋による報告「『日本近代文学』成立過程における異文化の興亡——『江戸』対『非江戸』」は、『日本近代文学史』から漏れた明治文学の潮流としての『江戸風文学』の再評価を試みる発表であった。本報告では、軽妙洒脱さや風刺に満ちた文体で洒落や滑稽の要素が強く、明治20年代から明治30年代にかけて一世を風靡した『江戸風文学』が、明治40年代には「リアリズム」と「厳粛」さを特色とする「自然主義」文学に代表される『日本近代文学』に取って代わられた過程が明らかにされた。また、明治20年頃から地方から東京に流入する、「新しい」教育を受けた地方出身者が増えたことで、『江戸風文学』の面白さを理解することが難しくなり、それによって、洒落や滑稽が文学の理念や美学としてではなく、「不真面目」なものとして捉えられたことが、『江戸風文学』の凋落の原因の一つとして指摘された。

デルマスは「ドゥルーズ哲学における日本映画」と題して報告し、日本の映画を通して新しい形而上学を模索したフランスの哲学者ジル・ドゥルーズの論考を検討した。ドゥルーズは黒澤明、溝口健二、小津安二郎を取り上げ、その作品の分析を行い、①黒澤は、状況が与えられることを問題が与えられることにまで高めながら、「行動を媒介にした、状況から変化した状

況への移行」である「大きな形式」を変化させるものである、②溝口は、強度と強度を結び付けながら、「環境への行動から出発して、新しい行動へと至る移行」である「小さな形式」を変化させる、③小津は、人間のありふれた出来事の現在のな時間を、「変化するものの不動の形式」である、無際限な時間に接続させることに成功した、と考えたことが紹介された。このようなドゥルーズの分析を通して、ドゥルーズが小津を「純粋な形而上学者」と考えていたことが明らかになった。

安井による報告「日本における国連中心主義と民間国連運動——ユネスコ運動を中心に」では、民間の運動としての国連中心主義に焦点を当てて発表がなされた。1957年2月の石橋湛山内閣の施政方針演説で初めて用いられて以来、政界における「国連中心主義」への支持は盛衰を繰り返したが、民間における国連中心主義は、1947年の民間ユネスコ運動の開始以来、支持を失うことなく一貫して続いていることが明らかにされた。また、1951年7月に日本がユネスコに加盟し、1952年6月には「ユネスコに関する法律」が成立し、民間運動と政治が接点をもつという日本では珍しい現象を起こしたユネスコ運動は、現在、その歴史的な使命を終えつつあるが、日本人あるいは日本の土着的な部分とが結び付き、イデオロギーを超えた、国際的な顔をした国内的な規範を作り上げたという点で、重要な意味を持つことが指摘された。

いずれも、報告者の日ごろの研究に基づく最新の成果の発表であり、国際日本学の現在の動向を知る上でも示唆に富む内容であった。(以上、敬称略)

【記事報告：鈴木 裕輔

(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)



及川 淳子 氏



申 恵蘭 氏



鈴木 裕輔 氏



高橋 寿美子 氏



ソニア・デルマス 氏



安井 裕司 氏

Hosei University Research Center for International Japanese Studies Guest Scholar Research Meeting

2009 Guest Scholar Research Report Meeting, Hosei University Research Center for International Japanese Studies

Date Saturday, 26 September 2009, 13:00-18:20
 Venue Hosei University Ichigaya Campus, Boissonade Tower 26F Conference Room A
 Speaker OIKAWA Junko, SHIN Hyeran, SUZUMURA Yusuke, TAKAHASHI Sumiko, Sonia DELMAS, YASUI Yuji
 Chair WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

The Hosei University Research Center for International Japanese Studies Guest Scholar Research Report Meeting was held on Saturday, 26 September 2009 from 13:00 until past 18:20 in the Boissonade Tower 26F Confer-

ence Room A of Hosei University Ichigaya Campus (Chiyoda Ward, Tokyo), and we heard reports by OIKAWA Junko, SUZUMURA Yusuke, TAKAHASHI Sumiko, Sonia DELMAS and YASUI Yuji. Titles were “Japan Research in China: Bibliographical Searches using CNKI [China National Knowledge Infrastructure], the reality and problems” (Oikawa), “Development of Murakami Haruki Literature in Korea: Murakami Haruki Literature as Socio-Cultural Symbols” (Shin), “Criticism by Ishibashi Tanzan towards Ideology as a Segmented Power” (Suzumura), “The Rise and Fall of Other Culture in the Process of the Establishment of ‘Modern Japanese Literature’: ‘Edo’ versus ‘Anti-Edo’” (Takahashi), “Japanese Film within Toulouse Philosophy” (Delmas), and “United Nations’ Centralism and the United Nations’ Civilian Movement in Japan: Focussing on the UNESCO Movement” (Yasui). Speakers gave presentations on the latest results of the research in which they are engaged, providing us with much idea of the present direction of international Japanese studies.

Report by SUZUMURA Yusuke (Guest Scholar, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

法政大学国際日本学研究所 2009年度 法政大学国際日本学研究所 客員学術研究員研究発表会

報告人 (按五十音图排序): 及川淳子、申惠兰、铃村裕辅、高桥寿美子、索尼娅·德鲁玛斯、安井裕司

时间: 2009年09月26日(周六) 13:00-18:20
 地点: 法政大学市ヶ谷校区布瓦索纳德大楼26层A会议室

主持人: 王敏(法政大学国际日本学研究所教授)

法政大学国际日本学研究所客員学術研究員研究発表会于2009年09月26日(周六)13时至18时20分,在法政大学布瓦索纳德大楼26层A会议室(东京·千代田区)举行。及川淳子、申惠兰、铃村裕辅、高桥寿美

子、索尼娅·德鲁玛斯、安井裕司等6人在会上作了报告。6人所作报告的题目分别为:“中国的日本研究——运用CNKI进行文献检索的现状与课题”(及川)、“村上春树文学在韩国的传播——作为社会文化记号的村上春树文学”(申)、“石桥湛三对于作为分裂性力量的意识形态的批判”(铃村)、“‘日本近代文学’产生过程中异文化的兴亡——‘江戸’与‘非江戸’的对立”(高桥)、“德鲁兹哲学中的日本电影”(德鲁玛斯)、“日本的联合国中心主义与民间联合国运动——以联合国教科文组织运动为中心”(安井)。上述所有报告均为报告人在长期研究的基础上获得的最新成果,对于了解国际日本学当前的动向具有丰富的启示性意义。(文中省略略称)

【执笔者: 铃村 裕辅

(法政大学国际日本学研究所客員学術研究員)】

호세이대학 (法政大学) 국제일본학연구소 2009년도 호세이대학 국제일본학연구소 객원 학술연구원 연구발표회

- 보고자 (일어 알파벳 순)
 오이카와 준코 (及川淳子), 신 헤란 (申惠蘭), 스즈무라 유스케 (鈴村裕輔), 다카하시 스미코 (高橋寿美子), 소나 델마스, 야스이 유지 (安井裕司)
- 일 시 2009년 9월 26일 (토) 13시 00분 ~ 18시 20분
- 장 소 호세이대학 이치가야 캠퍼스 보아소나드타워 26층 A 회의실
- 사 회 왕민 (王敏, 호세이대학 국제일본학연구소 교수)

지난 2009년 9월 26일 (토) 13시부터 18시 20분까지 호세이대학 보아소나드타워 26층 A 회의실 (도쿄·치요다구 (東京·千代田区)) 에서 호세이대학 국제일본학연구소 객원 학술연구원 연구발표회가

개최되었다. 오이카와 준코, 신 헤란, 스즈무라 유스케, 다카하시 스미코, 소나 델마스, 야스이 유지 등 6명이 보고에 참가했다. 논제는 각각 「중국에서의 일본 연구—CNKI를 활용한 문헌 검색 현황과 과제—」 (오이카와), 「한국에서의 무라카미 하루키 (村上春樹) 문학의 전개—사회문화적 기호로서의 무라카미 하루키 문학—」 (신), 「분단적인 힘으로서의 이데올로기에 대한 이시바시 탄잔 (石橋湛山) 의 비판」 (스즈무라), 「『일본근대문학』 성립과정에 있어서 이문화의 흥망—『에도 (江戸)』 대 『비에도 (非江戸)』」 (다카하시), 「틀뢰즈 철학에 있어서의 일본 영화」 (델마스), 「일본의 국제 연합 중심주의와 민간 국제 연합 운동—유네스코 운동을 중심으로」 (야스이) 였다. 보고자들은 모두 평상시 연구에 근거한 최신 성과를 발표했는데, 국제일본학의 현재 동향을 파악하는 데 시사하는 바가 큰 내용들이었다. (이상, 경칭 생략)

【기사 집필: 스즈무라 유스케 (鈴村裕輔,

호세이대학 국제일본학연구소 객원 학술연구원)】

国際日本学研究所特別セミナー

「日本のおふだをめぐるって」

- 日 時：2009年12月2日（水）18時30分～20時30分
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館2階 法政大学国際日本学研究所セミナー室
- 講 演：ジョゼフ・キブルツ（フランス国立科学研究センター教授・法政大学国際日本学研究所客員所員）
- 司 会：安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所長・文学部教授）

ジョゼフ・キブルツ氏（フランス国立科学研究センター教授・法政大学国際日本学研究所客員所員）を迎えての特別セミナーが開催された。まずはキブルツ氏から、「日本のおふだをめぐるって」の題で講演がなされ、引き続いてそれを受けて熱心な討議が行われた。多くの図像の実例を用いての大変具体的なお話ではあったが、講演要旨は以下のようにまとめられよう。

おふだは日本人の日常生活の中にあまりにも深く入り込んでいて、ふだん日本人の間で話題になることは少ない。しかし、現代東京の中心部でも町屋の門口に元三大師さんという紙のおふだが貼ってあったり、タクシー車内のバックミラーに成田不動明王の交通安全のお守りがかかっていたりするのである。日本人はあまり気に留める様子もないが、こうしたおふだの存在は、外国人の目には大変気になるものである。その結果、おふだを研究対象にすることも主に外国人によってということになる。

実際、おふだの三大コレクションと言われるすべてがヨーロッパにある。第一がB.H. チェンバレンとラフカディオ・ハーンによるもの（オックスフォード大学ピット・リバース博物館）、第二がアンドレ・ルロワ・グーランによるもの（ジュネーブ市民族学博物

館）、そして第三がベルナール・フランクによるもの（コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所）である。とくに第三のものについての大展覧会が2011年にパリのギメ美術館で開催予定であり、自分も監修者として準備に追われている。

近代化・都市化の流れの中で日本でも、迷信、さらには宗教は大きく退潮しつつあるが、他方でおふだの存在は、現代日本人の日常生活のなかにも宗教が、さらには迷信が深く染みこみ、残存していることを如実に示している。祈願であれ、厄除けであれ、そこには日本人の不可視の宗教性が、小作りにはあるが目に見える形で、途切れずに、表わされ続けてきているのである。しかもそこには仏教・道教・神道のさまざまな要素が素朴に、しかし巧みに折り合わされている。また美学的・美術史的に見ても、興味深い実験の跡がさまざまに発見される。日本人の信仰の歴史と実像とを捉えなおそうとすると、おふだの存在を決して無視することはできない。むしろそれは研究の宝庫なのである。

【記事執筆：安孫子 信
（法政大学国際日本学研究所所長・文学部教授）】

The Hosei University Research Center for International Japanese Studies Special Seminar

“On Japanese *ofuda* (talismans)”

- Speaker Josef KYBURZ (Professor, French National Centre for Scientific Research; Guest Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)
- Date Wednesday, 2 December 2009, 18:30-20:30
- Venue Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room
- Chair ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

A special seminar was held to welcome Josef KYBURZ

(Professor, French National Centre for Scientific Research; Guest Staff Member, Hosei University Research Center for International Japanese Studies), and we heard his lecture entitled “On Japanese *ofuda* (talismans)”. Talismans are so deeply engrained in Japanese people’s everyday lives, that they rarely stop to think about them. However, the existence of such talismans is of particular interest to foreigners. As a result it is largely foreigners who treat them as a focus for study. For example, in connection with an exhibition being organized at the moment, the large collection of Japanese talismans of Bernard Frank is widely known. Although religion was on the ebb in Japan during the modernization process, they show that religion remains deeply penetrating present-day Japanese minds. Whenever reattempting to grasp the history and real image of Japanese belief, we cannot afford to ignore the existence of the talisman; moreover, the talisman is the treasure house of such research.

Report by ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

国際日本学研究所特別研究会
“日本の护身符”

时 间：2009年12月02日(周四) 18:30-20:30
地 点：法政大学市ヶ谷校区 58年馆 2层国际日本学研究所研究室
主持人：安孙子 信(法政大学国际日本学研究所所长・文学部教授)
报告人：约瑟夫・基布鲁斯(法国国立科学研究中心教授・法政大学国际日本学研究所客员所员)

此次研讨会是法政大学国际日本学研究所为欢迎约瑟夫・基布鲁斯先生(法国国立科学研究中心教授・法政大学国际日本学研究所客员所员)来访而举办的特别

研讨会。约瑟夫・基布鲁斯先生在此次研讨会上,作了题为“日本の护身符”的演讲。由于护身符早已深深融入日本人的日常生活之中,日本人对此司空见惯,相互之间很少会谈及护身符这一话题。但是,在外国人的眼中看来,护身符却是一种不同寻常的存在。因此,以护身符为对象进行研究的多数是外国人。例如,贝鲁纳鲁・弗兰克就准备以其收藏的大量护身符来举办一场相关的展览会。而这一消息也引起了人们的广泛关注。虽然在近代化的进程中,宗教在日本已渐渐衰退,但另一方面,护身符的存在反映出宗教仍然深深地渗透并保留于现代日本人的内心深处。因此,在重新探寻审视日本人信仰的历史和现实之时,不仅绝不能忽视护身符的存在,反而应将其作为进行相关研究的宝藏来加以珍视。

【执笔人：安孙子 信
(法政大学国际日本学研究所所长・文学部教授)】

국제일본학연구소 특별 세미나
「일본의 부적에 관한 고찰」

- ・ 보고자 요셉 키브르츠(프랑스 국립과학연구센터 교수, 호세이대학 국제일본학연구소 객원 소원)
- ・ 일 시 2009년 12월 2일(수) 18시 30분 ~ 20시 30분
- ・ 장 소 호세이대학(法政大学) 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실
- ・ 사 회 아비코 신(安孫子 信, 호세이대학 국제일본학연구소 소장, 문학부 교수)

국제일본학연구소는 요셉 키브르츠(프랑스 국립과학연구센터 교수・호세이대학 국제일본학연구소 객원 소원) 씨를 초빙해 특별 세미나를 개최했다. 요셉

키브르츠씨는「일본의 부적에 관한 고찰」이라는 주제로 강연했다. 부적은 일본인들의 일상생활 속에 매우 깊이 스며들어 있기 때문에 보통 일본인들 사이에서 화제가 되는 경우는 흔하지 않다. 그러나 이러한 부적이 존재는 외국인에는 대단히 이색적이다. 그 결과, 부적을 연구 대상으로 하는 것도 주로 외국인에 의해 주도되고 있다. 예를 들면, 전람회를 열 예정인 베르나르 프랑크의 부적 대 컬렉션은 그 전형적인 예라 할 수 있다. 근대화하는 과정에서 있어서 일본에서도 종교는 퇴조하고 있는데, 그럼에도 부적이 존재한다는 것은 현대 일본인의 마음속에 종교가 깊이 뿌리박혀 있으며, 아직도 잔존하고 있다는 사실을 나타내는 것이다. 따라서 일본인들의 신앙의 역사와 실상을 파악하고자 할 때 부적이 존재는 결코 무시할 수 없다. 오히려 부적이 연구의 보고라고 할 수 있다.

【기사 집필：아비코 신(安孫子 信, 호세이대학 국제일본학연구소 소장・문학부 교수)】



ジョゼフ・キブルツ 氏



会場の様子

法政大学国際日本学研究所主催

法政大学競争的資金獲得研究「世界における江戸学の現在 — 18世紀を中心に」ワークショップ

「江戸時代におけるナショナリズムの表現」

- 日 時：2009年9月9日（水）、10日（木）
10時00分～18時00分 問題提起と質疑応答・議論
18時00分～21時00分 ディスカッションと懇親
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 25階 B会議室
- 講 演：田中優子、小秋元段、横山泰子、小林ふみ子（法政大学）、山本文志（秋田県立美術館）、奈良林愛（岩波書店）、崔官（韓国・高麗大学）、黄智暉（台湾・東呉大学）、マルコ・ゴットアルド（コロンビア大学）、李忠濬（東京大学）
- 司 会：田中 優子（法政大学国際日本学研究所兼任所員・社会学部教授）

2009年9月9日と10日の両日、法政大学において、ワークショップ「江戸時代におけるナショナリズムの表現」を開催した。これは法政大学競争的資金獲得助成金を得た「世界における江戸学の現在 — 18世紀を中心に」の一環としておこなわれたものである。

18世紀の大衆文化ではどのような「日本意識」が胚胎されたかを探るワークショップであった。この時期は中国・欧州から多大な影響を受け、その中で新しい「日本的」なる表現や、複数文化圏を混合した独特な表現が作り出された。その結果「日本」を強調する表現も現れ、一方で国学が発生・発展した。この研究ではテキストや絵画や図版を使い、それがどのような日本意識であったかを考えると同時に、そのような作品をめぐる近現代の言説に内在してきたナショナリズムをも対象化した。

発表は田中優子「張り抜き富士」、小秋元段「活字版の淵源をめぐる諸問題」、横山泰子「玉藻前をめぐるエキゾチズムとナショナリズム」、韓京子「近松の浄瑠璃にあらわれた日本優越意識」、黄智暉「曲亭馬琴の対外意識」、小林ふみ子「こいつはニッポン — 江戸戯作の日本自慢」、李忠濬「近世文学における楠正成の受容」、奈良林愛「近世人から見た外国語、外国語から見た日本語」、マルコ・ゴットアルド「江戸時代の一般民衆の国家空間意識の形成における旅の役割」、山本文志「秋田蘭画をめぐる、未着手の文化的背景」、崔官「18世紀をとらえる観点」である。

このように日本、韓国、中国、台湾、イタリアの近世文学・文化研究者が集まり、各方面からの発表と討論をおこなったのである。その過程で、次の課題が浮かび上がってきた。

- 1、作品に登場する「日本」意識やその表現は後の

ナショナリズムとは異なり、大量に入ってきた中国文化や欧州文化の中で生まれた、地域としての日本の特性の発見ではないかと思われる。

- 2、「日本」意識は、笑いの対象でもあり、非常に多様で豊かな形と意味とニュアンスをもって現れる。
- 3、外国語習得の必要に迫られるなかで、日本語の特性の発見もあった。実際的な外部への対応が日本意識醸成の契機だったのである。同時に言葉への意識は江戸語および国内の諸語への意識を生み出し、それが戯作にも反映された。
- 4、富士山イメージに象徴されるように、今日「日本的」とされるものが近世当時では地域を象徴するものでもあった。地域意識と日本意識とが明確には分離できない形で存在し、そこに日本意識がアジア圏内での地域アイデンティティの一種として存在した可能性が見える。
- 5、秋田蘭画に代表される絵画や陶磁器などの変化は、日本文化のイノベーションとして出現した。そこには日本「意識」でなく、日本の「手法」「方法」の発見が見える。

以上のことから今後、近世における「表現された日本意識」「新しく出現した日本的方法」「アジアの中の地域としての日本」という3本の柱を立て、さらなる研究をすすめるつもりである。これらの研究は、いわゆる「日本らしさ」を軸とする日本像を超えて、さらに多様な日本文化を示し、日本の将来像を提起するであろう。とりわけ東アジアの全体の中で、この多様性と可能性の提起は重要なものになる。

【記事執筆：田中 優子

（法政大学国際日本学研究所兼任所員・社会学部教授）】



田中 優子 教授



会場の様子

Hosei University Research for Funding Competition:

“Present-day ‘Edogaku’ throughout the World: Focussing on the 18th Century”

Hosted by Hosei University Research Center for International Japanese Studies

Workshop “Expressions of Nationalism during the Edo Period”

Speaker TANAKA Yuko, KOAKIMOTO Dan, YOKOYAMA Yasuko, KOBAYASHI Fumiko (Hosei University), YAMAMOTO Takeshi (Akita Prefectural Art Museum), NARABAYASHI Ai (Iwanami Shoten), CHE Guan (Korea University, Korea), KO Chi Ki (Soochow University, Taiwan), Marco GOTTARDO (Columbia University), LI Chung Hao (University of Tokyo), HAN Kyonja (Dankook University, Korea)

Date Wednesday, 9 September; Thursday, 10 September 2009

10:00-18:00 Issue presentation, questions and answers, and debate

18:00-20:00 Discussion and informal gathering

Venue Hosei University Ichigaya Campus. Boissonade Tower 25F Conference Room B

Chair TANAKA Yuko (Special Adviser, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Hosei University Faculty of Sociology)

We proposed two ideas in this debate. The first is that when we talk about Edo-period history and culture, we should not use the word “sakoku” (national isolation). Despite the fact that the word “sakoku” did not exist during the Edo period, its use since has had the effect that a distorted image of the Edo period has been created. We debated the questions as to why the word is used, and what kind of ideas are contained in it for Japanese people, by referring to Watsuji Tetsuro’s *Sakoku: Nihon no Higeiki (National Isolation: Japan’s Tragedy)*.

The second proposal is that world movements actually contributed to the advent of the Edo period. We saw how goods and culture shifted round East Asia through Japanese pirate intervention, South American silver entered Manila and Japan’s silver lost its competitive power. Also, how Asia and Japan became economically impoverished as a result of Hideyoshi’s invasion of Korea, much Korean culture and technology entered Japan and formed the basis of Japanese technology, and as a consequence Japan was able to achieve economic independence from Asia. As a result, we suggested, it was from within diverse and vast foreign cultures that the consciousness of a “Japan” was born.

For the above reasons, the Edo period was a time when formal diplomatic relations were formed with foreign countries, and also when ordinary people met with foreign culture for the first time in Japanese history, making into their own a great variety of foreign products.

Report by TANAKA Yuko (Special Adviser, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Hosei University Faculty of Sociology)

法政大学国際日本学研究所主办 法政大学竞争性资金研究课题

“世界范围内的江户学研究现状 —— 以18世纪为中心”

“江户时代民族主义的表现” 研讨会

报告人：田中优子、小秋元段、横山泰子、小林ふみ子（法政大学）、山本文志（秋田县立美术馆）、奈良林爱（岩波书店）、崔官（韩国・高丽大学）、黄智暉（中国台湾・东吴大学）、马克・格达鲁德（哥伦比亚大学）、李忠濬（东京大学）、韩京子（韩国・坛国大学）

时间：2009年09月09日（周三）、10日（周四）
10：00-18：00 提问、答疑及讨论

18：00-20：00 交流及联欢

地点：法政大学市ヶ谷校区布瓦索纳德大楼25层B会议室

主持人：田中优子（法政大学国际日本学研究所兼任所员・社会学部教授）

此次研讨会主要提出了两项观点。其中第一项观点认为，在讨论研究江户时代的历史及文化之时，不应该使用“锁国”一词。实际上，在江户时代并不存在“锁国”一词。但是尽管如此，“锁国”一词如今却被学界

广泛使用，以至于在人们的脑海中形成了一幅谬误的江户时代的形象。那么“锁国”一词为何会被广泛使用呢？在“锁国”一词中，又包含着日本人怎样的思考呢？与会者通过和辻哲郎的《锁国——日本的悲剧》一书对上述课题进行了讨论。

此次研讨会提出的第二项观点认为，世界形势的变动与江户时代的出现之间存在着密切的联系。例如，倭寇的出现对东亚地区的物质生产和文化交流造成了巨大的影响；南美地区出产的白银大量流入马尼拉，使得日本出产的白银失去了竞争力；丰臣秀吉发动侵略朝鲜的战争导致日本乃至整个亚洲地区陷入经济疲软；朝鲜半岛的大量文化和技术传入日本，逐步构筑起了日本在技术领域的基础，同时帮助日本摆脱了对于亚洲地区的依赖，并实现了经济上的独立；正是因为大量丰富的外国文化的影响，才最终催生出“日本”的民族意识……类似的例子还可以举出很多，而上述诸多史实都可以看做是江户时代得以出现的原因。

综上所述，江户时代实际上是日本开始与外国逐步建立起正式外交关系的时代，是日本历史上普通民众第一次接触到外国文化的时代，是日本不断地将种类繁多的外国产品实现国产化的时代。

【执笔人：田中 优子

（法政大学国际日本学研究所兼任所员・社会学部教授）】

호세이대학 (法政大学) 국제일본학연구소
주최 호세이대학 경쟁적 자금획득 연구

「세계 에도학 (江戸学) 의 현재 — 18 세기
를 중심으로」

워크숍 「에도시대 (江戸時代) 내쇼
널리즘의 표현」

- 보고자 다나카 유코 (田中優子), 고아키토 단 (小秋元段), 요코야마 야스코 (横山泰子), 고바야시 후미코 (小林ふみ子) 이상 호세이대학 야마모토 다케시 (山本丈志, 아키타 (秋田) 현립 미술관), 나라바야시 아이 (奈良林愛, 이와나미 쇼텐 (岩波書店)), 최관 (한국·고려대학), 코치키 (黃智暉, 台湾, 東吳大学), 마르코 고타르도 (콜롬비아대학), 이충호 (李忠澍, 東京大学), 한경자 (韓京子, 한국·단국대학)
- 일 시 2009년 9월 9일 (수), 10일 (목)
10시 00분 ~ 18시 00분 문제 제기와
질의 응답·토론
18시 00분 ~ 20시 00분 토론과 간담회
- 장 소 호세이대학 이치가야 캠퍼스
보아소나드타워 25층 B 회의실
- 사 회 다나카 유코 (田中優子, 호세이대학 국제
일본학연구소 겸담 소원·사회학부 교수)

본 워크숍에서는 두 가지 주장이 제기되었다. 첫 번째는 에도시대의 역사와 문화를 논할 때 「쇄국」이라는 용어를 사용해서는 안된다는 주장이다. 에도시대에는 「쇄국」이라는 용어가 존재하지 않았는데도 그러한 용어가 사용됨으로 인해 에도시대에 관한 잘못된 이미지가 형성되었다. 왜 그러한 용어가 사용되었는지, 그 용어에는 일본인의 어떠한 사고가 함의되어 있는지에 관해 와츠지 데츠로 (和辻哲郎) 의 『쇄국 — 일본의 비극 —』 (『鎖国 — 日本の悲劇 —』) 을 근거로 논의되었다.

또 다른 주장은 에도시대 출현에는 세계의 동향이 관여했다는 것이다. 에도시대가 출현한 이유로 왜구 (倭寇) 를 매개로 동아시아로 물품과 문화가 이동했다는 점, 남미의 은이 마닐라로 유입되어 일본의 은이 경쟁력을 잃게 된 점, 도요토미 히데요시의 조선침략으로 아시아와 일본의 경제가 피폐해진 점, 많은 조선의 문화와 기술이 일본으로 유입되어 일본기술의 기초가 된 점, 그것을 바탕으로 일본이 아시아로부터 경제적으로 자립할 수 있었던 점, 대량의 다양한 외국문화 안에서 결과적으로 「일본」 의식이 탄생했다는 점 등이 예시되었다.

이와 같은 이유로 에도시대는 외국과 정식 외교관계를 수립한 시대였으며, 일본 역사상 최초로 서민이 외국 문화를 접하게 되었으며, 다양한 외국제품의 국산화를 실현한 시대라고 할 수 있다.

【기사 집필 : 다나카 유코 (田中優子, 호세이대학
국제일본학연구소 겸담 소원·사회학부 교수)】

法政大学国際日本学研究所主催
法政大学競争的資金獲得研究
「世界における江戸学の現在—18世紀を中心に」
ワークショップ
「江戸時代における
ナショナリズムの表現」

<概要>
近世日本、とりわけ18世紀において、おもに大衆文化の次元で、対外意識がどのように表象され、その結果として、どのような「日本」意識が醸成されたかを探る。
この時期、読本(よみほん)、洒落本、黄表紙、俳諧、狂歌、狂詩、絵画、浮世絵などが中国・欧州から多大な影響を受け、その中で新しい「日本的」な表現や、複数文化圏を混合した独特な表現が作り出された。また、「日本」を強調する表現も現れ、一方で国学が発生・発展した。
実際に存在するテキストや絵画や図版を使い、それがどのような日本意識であったかを考えると同時に、そのような作品をめぐる近現代の研究者と研究史の中に内在してきたナショナリズムをも、対象化する。

■日 時 2009年9月9日(水)、10日(木)
両日とも、10~18時 問題提起と質疑応答・議論
18~21時 ディスカッションと懇親

■会 場 法政大学市ヶ谷キャンパス
ポアソナード・タワー25階B会議室

■報告者
田中優子、小林ふみ子、横山泰子、小秋元段 (法政大学)
山本丈志 (秋田県立美術館) 奈良林愛 (岩波書店) 崔 官 (韓国·高麗大学)
黄 智暉 (台湾·東吳大学) マルコ・ゴッタルド (コロンビア大学)
李 忠澍 (東京大学) 韓 京子 (韓国·檀国大学)

■参加申込
専門的な研究会となりますので、その点をご理解のうえ、参加希望の方は下記までメールまたは電話でお申し込みください。定員になり次第締切ります。

連絡先: 法政大学国際日本学研究センター事務局
E-mail: nihon@hosei.ac.jp
〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-3 九段校舎別館1階
TEL 03-3264-9682 · FAX 03-3264-9884
http://aterui.i.hosei.ac.jp/

HOSEI

ポスター

チカコ・トワイエ教授の研究所訪問

- 日 時：2009年7月15日(水)
- 場 所：法政大学国際日本学研究所(HIJAS)

去る7月15日にINALCO(フランス国立東洋言語文化大学)日本学部教授、チカコ・トワイエ氏が法政大学国際日本学研究所(HIJAS)を訪問されました。当日は、星野常務理事、安孫子所長、王教授、林統括本部長がトワイエ教授をお迎えし、INALCOとHIJAS、さらにはINALCOと法政大学全体との今後の交流のあり方について、有意義な意見交換を行いました。これまでも研究者単位での研究協力は行われてきましたが、それをさらに拡大して、より正式の、大学同士の交流関係を構築していくことの重要性が、話し合いでは相互に確認されました。

【記事執筆：安孫子 信
(法政大学国際日本学研究所所長・文学部教授)】



左より安孫子所長(法政大学教授)、王教授(法政大学)、チカコ・トワイエ教授、星野センター長(法政大学理事)、林統括本部長

Visit to Center by Professor Chikako THOYER

Date Wednesday, 15 July 2009
Venue Hosei University Research Center for International Japanese Studies (HIJAS)

On 15 July of last year a visit was made to the Center by Chikako THOYER, Professor of Japanese Faculty, INALCO (Institut National des Langues et Civilisations Orientales, France). On the day Professor Thoyer was met by Governor Hoshino, Director Abiko, Staff Member

Wang, and Head of International Exchange Center, Hayashi. There was a significant exchange of ideas concerning the nature of future exchange between INALCO and the Center, as well as between INALCO and Hosei as a whole. We had hitherto seen cooperative research by scholars on an individual level, however during discussions both sides acknowledged the importance of extending this to build a more formal relationship of exchange between the two learning institutions.

Report by ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

关于奇卡科・特瓦耶教授访问法政大学国际日本学研究所的报告

时 间：2009年07月15日(周四)
地 点：法政大学国际日本学研究所(HIJAS)

2009年07月15日，法国国立东方语言文化大学(INALCO)日本学部教授奇卡科・特瓦耶先生对法政大学国际日本学研究所进行了访问。星野常务理事、安孙

子所长、王教授和林总括本部长会见了奇卡科・特瓦耶先生，并就 INALCO 与 HIJAS 以及 INALCO 与法政大学今后开展交流的方式等问题，深入地交换了意见。此前，双方一直是以研究者为单位在开展研究合作，而在此次会谈中，双方相互都进一步明确了继续扩大合作，共同构建更加正式的大学间交流关系的重要性。

【执笔人：安孙子 信
(法政大学国际日本学研究所所長・文学部教授)】

치카코 트와이에 교수 연구소 방문

· 일 시 2009년 7월 15일(수)
· 장 소 장소: 호세이대학(法政大学) 국제일본학연구소

지난 7월 15일 INALCO(프랑스 국립동양언어문화대학) 일본학부 교수인 치카코 트와이에씨가 본 연구소를 방문했다. 호시노(星野) 상무이사, 아비코 소장, 왕(王) 소원, 하야시(林) 국제교류센터 사무부장이 트와이에씨를 맞이하여 INALCO와 본 연구

소, 나아가 향후 INALCO와 호세이대학 전체의 교류 방향에 관하여 유익한 의견을 나누었다. 물론 지금까지도 연구자 레벨의 연구협력은 이루어지고 있었으나, 이번 환담을 통해서 그러한 교류를 한층 확대하여 보다 정식 채널을 통한 대학 간 교류관계의 구축이 중요하다라는 점을 상호 확인했다.

【기사 집필: 아비코 신(安孫子信,
호세이대학 국제일본학연구소 소장・문학부 교수)】

サカエ・ムラカミ = ジルー教授の研究所訪問

- 日 時：2010年1月8日(金) 15時00分～16時00分
- 場 所：法政大学国際日本学研究所(HIJAS)

フランス・ストラスブール大学教授で、キーンツハイムのアルザス欧州日本学研究所(CEEJA)の副所長を務めておられるムラカミ = ジルー(Murakami-Giroux)先生が新年早々に法政大学国際日本学研究所(HIJAS)を訪問された。HIJAS側からは、星野常務理事、クライナー教授、所長安孫子がお迎えし、ムラカミ = ジルー教授との間で、両研究所および法政・ストラスブール両大学の研究協力関係の今後について、突っ込んだ話し合いを行った。その中では、CEEJAの活動をさらに活性化させるために、CEEJAを軸に置く大学連合を日本で立ち上げる構想も話題に出され、その実現に向けての活発な意見交換も行われた。

【記事執筆：安孫子 信
(法政大学国際日本学研究所所長・文学部教授)】



左より安孫子所長(法政大学教授)、クライナー教授(法政大学)、サカエ・ムラカミ = ジルー教授、星野センター長(法政大学理事)

Visit to Center by Professor Sakae MURAKAMI-GIROUX

Date Friday, 8 January 2010, 15:00-16:00
Place Hosei University Research Center for International Japanese Studies (HIJAS)

Professor Murakami-Giroux, Professor of Strasbourg University, France, and Vice President of Centre Européen D'Etudes Japonaises D'Alsace (CEEJA) in Kientzheim, Alsace, visited the Center early in the new year. From HIJAS she was met by Governor Hoshino, Professor Kreiner and Research Center for International Japanese Studies Director Abiko, and there was enthusiastic discussion with Professor Murakami-Giroux about future cooperative research relationships between the two Centers, and between Hosei and Strasbourg Universities. One subject brought up was the idea of creating a university alliance in Japan with CEEJA as its axis, which would help boost the activities of the CEEJA. There was a lively exchange of opinions as to how this might be realized.

nese Studies Director Abiko, and there was enthusiastic discussion with Professor Murakami-Giroux about future cooperative research relationships between the two Centers, and between Hosei and Strasbourg Universities. One subject brought up was the idea of creating a university alliance in Japan with CEEJA as its axis, which would help boost the activities of the CEEJA. There was a lively exchange of opinions as to how this might be realized.

Report by ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

关于萨卡耶・村上 = 吉鲁教授访问法政大学国际日本学研究所的报告

时 间：2010年01月08日(周五) 15:00-16:00
地 点：法政大学国际日本学研究所(HIJAS)

新年伊始，法政大学国际日本学研究所(HIJAS)就有幸迎来了法国・斯特拉斯堡大学教授、阿尔萨斯欧洲日本学研究所(CEEJA)副所长萨卡耶・村上 = 吉鲁(Murakami-Giroux)先生的访问。星野常务理事、库拉

伊那教授、国际日本学研究所所长安孙子共同代表HIJAS，与萨卡耶・村上 = 吉鲁教授就双方研究所以及法政大学与斯特拉斯堡大学之间今后构建研究合作关系等事宜进行了深入的交流。其间，双方谈到，为了进一步推进位于肯兹海姆的CEEJA的研究活动，希望能够在日本建立起以CEEJA为基轴的大学联盟。同时，双方还就如何实现这一构想，积极地交换了意见。

【执笔人：安孙子 信
(法政大学国际日本学研究所所长・文学部教授)】

사카에 무라카미 = 지루 교수 연구소 방문

· 일 시 2010년 1월 8일(금)
· 장 소 호세이대학(法政大学) 국제일본학연구소(HIJAS)

프랑스 스트라스부르(Strasbourg)대학 교수로 킨츠하임의 알자스구주일본학연구소(CEEJA) 부소장을 맡고 있는 무라카미 = 지루(Murakami-Giroux) 교수가 연초 국제일본학연구소(HIJAS)를 방문했다. 국제일본학연구소에서는 호시노(星野) 상무이사, 클라이너교수, 국제일본학연구소 소장을 맡고 있

는 아비코(安孫子)교수가 무라카미 = 지루교수를 맞이했다. 환담회에서는 두 연구소뿐만 아니라 호세이대학과 스트라스부르대학의 연구협력 관계를 증진시키기 위한 방안을 모색했다. 특히 알자스구주일본학연구소의 활동을 더욱 활성화 시키기 위한 방안으로서, 알자스구주일본학연구소를 중심으로 하는 대학연합기관을 일본에 설립하자는 의견이 제기되어, 실현을 위한 활발한 의견 교환도 이루어졌다.

【기사 집필：아비코 신(安孫子 信,
호세이대학 국제일본학연구소 소장・문학부 교수)】

シャルロツテ・フォン・ヴェアシュア教授の研究所訪問

- 日 時：2009年7月22日（水）
- 場 所：法政大学国際日本学研究所（HIJAS）

フランス国立高等研究院のシャルロツテ・フォン・ヴェアシュア教授（お名前からわかるように国籍はドイツ）が法政国際日本学研究所（HIJAS）を訪問された。日本古代史の研究者として日本でもよく知られており、ボン大学で遣唐使について研究後、パリの高名な日本古代史研究者であるエライユ氏（御堂関白記のフランス語訳などで知られる）に師事された。今では日本古代における五穀文化について研究中で、日本の古代史研究者にとっては思いもよらないような発想の注目すべき研究を続けておられる。法政大学在職中の女性日本古代史研究者ヴァン・フーテム助教、安孫子所長や日本古代史を専攻する博士課程の院生らと共に外国人研究者からみた日本古代史研究の重要性などについて有意義な意見交換が行われた。次の来日時にはHIJASで研究報告をしていただけるとのことで、楽しみである。



手前右より 小口教授（法政大学）、ヴェアシュア教授、安孫子所長（法政大学教授）、ヴァン・フーテム助教（法政大学）、他小口ゼミ関係者の方々

【記事執筆：小口 雅史（法政大学国際日本学研究所 兼担所員、文学部教授）】

Visit to Center by Professor Charlotte VON VERSCHUER

Date Wednesday, 22 July 2009
Place Hosei University Research Center for International Japanese Studies (HIJAS)

Professor Charlotte von Verschuer of Ecole Pratique des Hautes Etudes, France, visited the Center. (She herself is of German nationality). She is widely known also in Japan as researcher of Japanese ancient history. After conducting research on the Kentoshi (7th-century Japanese envoy to China) at Bonn University, she studied under the famous scholar of Japanese ancient period history, Professor Herail (translator into French of *Midokanpakuki* [The Diary of Fujiwara Michinaga] etc.) in Paris. Now

she is engaged in research of Gokoku no Bunka (Culture of the Five Grains) of ancient Japan, and continues to produce notable research based on ideas fresh to ancient period history scholars in Japan. She sat with Belgian researcher of Japanese ancient history, Professor van Goethem who is currently employed at Hosei University, and exchanged significant ideas with Center Director, Abiko, and doctoral course students specializing in Japanese ancient history, about the importance of Japanese ancient period history as seen by foreign researchers. We look forward to her giving a report of her research at HIJAS during her next visit to Japan.

Report by OGUCHI Masashi (Special Adviser, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

关于夏鲁罗特・冯・维阿休阿教授访问法政大学国际日本学研究所的报告

时 间：2009年07月22日（周四）
地 点：法政大学国际日本学研究所（HIJAS）

2009年07月22日，法国国立高等研究院的夏鲁罗特・冯・维阿休阿教授（德国籍）对法政大学国际日本学研究所（HIJAS）进行了访问。夏鲁罗特・冯・维阿休阿教授作为日本古代史研究领域的专家，在日本国内也享有盛名，曾在波恩大学进行过遣唐使方面的研究，后师从于巴黎赫赫有名的日本古代史研究专家艾拉伊尤先生（因曾将《御堂关白记》等书翻译为法语而为人们所熟知）。目前，夏鲁罗特・冯・维阿休阿教授正

致力于对日本古代的五谷文化进行研究，由于其独特的研究视角往往是日本的古代史研究者所难以企及的。因此其研究也格外值得关注。由于法政大学的在职教师中恰好有一位名叫福特姆的女教师是来自比利时的日本古代史研究专家。因此，安孙子所所长特意也邀请其同正在攻读日本古代史博士课程的博士研究生一起，与夏鲁罗特・冯・维阿休阿教授就外国研究者眼中的日本古代史研究的重要性等话题，深入地交换了意见。此外，夏鲁罗特・冯・维阿休阿教授还受邀同意在下次来日访问时，在HIJAS进行一场专题研究报告。

【执笔人：小口 雅史（法政大学国际日本学研究所 兼任所員・文学部教授）】

샤롯데 폰 베르슈어(Charlotte Von Verschuer) 교수 연구소 방문

- 일 시 2009년 7월 22일 (수)
- 장 소 호세이대학 (法政大学) 국제일본학연구소 (HIJAS)

지난 7월 22일 프랑스 국립고등연구원의 샤롯데 폰 베르슈어교수 (국적은 독일) 가 호세이대학 국제일본학연구소 (HIJAS) 를 방문했다. 베르슈어교수는 일본에서 일본고대사 연구자로도 널리 알려져 있는데, 독일 본대학에서 「견당사 (遣唐使)」에 관해 연구한 후, 파리의 저명한 일본고대사 연구자 에라이유씨 (『御堂関白記』의 프랑스어 번역자로도 알려져 있

음) 에게 사사했다. 현재는 일본고대의 오곡 (五穀) 문화를 연구하고 있으며 일본고대사 연구자로서는 상상도 할 수 없는 발상으로 괄목할 만한 연구를 계속하고 있다. 벨기에 여성으로 호세이대학에 재직 중인 일본고대사 연구자 푸템씨도 동석한 가운데, 외국인 연구자가 본 일본고대사 연구의 중요성 등에 관하여 아비코국제일본학연구소 소장, 일본고대사를 전공하는 박사과정 학생들과 함께 유익한 의견을 교환했다. 다음번 일본 방문에는 국제일본학연구소 (HIJAS) 에서 연구보고를 하기로 되어 있어 기대가 크다.

【기사 집필 : 오구치 마사시 (小口雅史, 호세이대학 국제일본학연구소 담임 소원·문학부 교수·국제일본학인스티튜트 전담 교수)】

〈お知らせ〉

ニューズレター NO.12 翻訳者紹介

(英語翻訳)

バーバラ・クロス (ロンドン大学 SOAS)

(中国語翻訳)

謝 宗睿 (元法政大学国際日本学研究所 外国人客員研究員、中国国務院発展研究センター ヨーロッパ・アジア社会発展研究所助理研究員)

(韓国語翻訳)

申 惠蘭 (法政大学大学院国際日本学インスティテュート)

法政大学国際日本学研究所は、このたび、研究所の①正式英語名称と、②その略号、および、③それに基づくロゴを、以下のように定めましたのでお知らせいたします。

- ① Hosei University Reseach Center for International Japanese Studies
- ② HIJAS
(Hosei University Reseach Center for International **J**apanese **S**tudies)
- ③ 表紙右上を参照してください